

広島調査報告 2005年8月30日から9月1日

田尾陽一

8月30日夕方 広島大学 市川 浩教授と打ち合わせ。

国際シンポジウム「20世紀における戦争・冷戦と科学・技術—
国際共同研究の展望—」の研究班代表。

常石敬一、川村豊、ヘルムート・マイエル、ジェシカ・ワン、エドワルト・I・
コルチンスキー、スチュワートウイリアム・レスリー

2005年10月(日曜日)

広島市まちづくり市民交流プラザ

田尾参加予定

市川 浩先生は、旧ソ連の原子爆弾開発計画等、科学技術史の専門家。今後の研究協力を約束する。

8月31日午前10時 広島大学 原爆放射線医科学研究所附属国際放射線情報センター
川野徳幸助手訪問

原爆被害者の臓器が保存されている。また、10,000 ぐらいの各被爆者の調査表が保存されている。図書室も資料が整理されている。

放射線影響研究所にはまだまだ多くの貴重な資料があるはずという意見。

ますますこれら諸機関のデータや資料を、全体リンクしたアーカイブの必要性を感じる。

午後1時30分 原爆資料館 畑口館長、會澤学芸員を訪問。

昨年8月から、被爆資料19,000点のデータベース化、公開も1部行っている（平和データベース）主に瓦、建築材、写真（被爆前後）2000枚、市民の描いた絵3,500枚、戦前の広島の絵800枚、美術品700点、ビデオ（証言）、映像など

収集キャンペーン 国立追悼記念館、NHK、中国新聞
医療関係は、 放影研、原医研から

平成 13 年 展示更新 放射線の影響等を取り入れる。

畑口館長

地方公共団体、県の平和博物館は、1 年 1 度話し合いをしている。この秋は長崎でやる。広島、長崎、沖縄、埼玉、横浜、立命館大、大阪。データベース化したい。

原爆投下 5 日後の空撮写真をアメリカから入手、発表したら、放影研にあった（何が必要だか分からないと言っていた）。

全体が連携するべき。

現在、年間入館者 1,060,000 人、そのうち外国人 110,000 人

9 月 1 日 11 時 広島大学 牟田泰三学長訪問

平和は大学の理念でもある。広大文書館に、平岡前市長の資料が寄贈されている。全国に散らばっている資料をつなげることには賛成。総研大が役割をはたしてもらいたい。

広島訪問記

藤本順平

2005年8月30日～9月1日

1. 平成17年8月30日 午後6時より、広島駅近くで広島大学教授、市川浩氏の話
を聞く、ソビエトの武器に関する歴史家。
科研費に応募することを要請される。
2. 8月31日 10時、原医研、附属国際放射線情報センター、助手川野徳幸氏
4階にある、臓器保存所を見学、もともとホルマリン漬けだが、重量があることと、入
れ替えが必要なため、最近5年から10年は真空パックに。詳しい数字はあげられ
ない。何故、ここにあるのかが問題になる資料も存在するため(遺族の承諾が絡
む)。昭和30年代から揃い始める。直後は AFIP (Armed Forces Institution of
Pathology) からの昭和20年代のものも。最も早期のものは45年9月8日のもの。
個人情報保護法で出せなくなっている。保管の目的は DNA 解析、しかし、本当に
どう活用できるかは不明。AFIP は 50年代、60年代に資料を分析して論文にして
いるため、返還。昭和36年から原医研で集め始めているが経緯は不明。
建物が老朽化し、傾きかけている。ホルマリンの染み出しがある。
1万弱の調査票が保存されている。マイクロフィルム化もされているが、カードファイ
ルとして整理がついている。本人からの聞き取りもあるがカルテからの転記もある。
被爆位置、服の状況、やけどの程度、症状(下痢、熱)等が記載。被爆1号の「ナカ
ミドリ」さんの調査票も存在(カルテそのものは東大で紛失、調査票はその転記)。
医学的にはすべて理解済みとなっている(米は急性症状のデータ収集が目的)が
アーカイヴとして貴重。調査票に関しては、今夏毎日新聞が特集記事を企画した。
カルテは保護法により見せられないが、整理済み。放射線による白血病は1978年
にようやく判明。これには AFIP の資料が有効となった。ガンとの関連も最近ようや
く判明しつつあり。
唾液腺等の AFIP によるスライドブロック(プレパラート標本)もある。米国では、
ABCC や他の機関の資料は AFIP に集約された。なぜ、日本に戻ってきたかは、
放影研が経緯を知っているはず。放影研には公開されていない社会的資料が多
数存在する。
図書室を見学。約6700冊。貴重な初版本は3階で保管。1967年からの新聞
記事の切り抜きを保管。「原爆災害学術資料に関する報告 1973年」を見せ
てもらおう。今は絶版、しかし、全国の主要図書館に配本されている。しかし、
個人名が記載されているので、注意。この報告書による原医研保存の資料数
は以下の通り、

	資料数	
	第一次	広島関連分
医学ホルダー	17993	8998
ホルマリン検体	681	37
ブロック	953	271
スライド	1769	560
写真	1879	1232

また、図書室にはマンハッタンプロジェクト関連の資料もあり。関連新聞記事は年間 5 千に及ぶ。9 月 14 日に一般公開を行う。

厚生省の行う調査は常にシッパなし。95 年にヒバク手記を収集、約 4 万件、(9 千件?)しかし、実態は 500 件のみ公開。調査票の公開に関しては、日米関係の悪化を懸念との向きもある。図書に関しては、原医研が誇る。しかし、拡散しつつあることを懸念。田尾氏のヒバク状況に興味を示す。爆発の光を記憶している人は数少ない。爆風を感じたかとの質問。

星教授の名、しかし、何故この名前が出たかは不明。

3. 8 月 31 日午後 1 時半、原爆資料館

アポイントの手違いで当初は学芸員の會澤さんに話しを聞く。当資料館は記念資料館と記念館が統合されたもの。被爆者遺品、被爆実物を含む関連資料が 1 万 9000 点。債権、罹災証明書等も。写真は戦前、戦後を通し、約 2000 枚を整理中。了承済みのもののみ公開。図書は戦争、原爆、証言ビデオ(本人了承済みを公開)、映像を合わせて 5 万点。「原爆の絵」として体験者の絵が 3500 枚、戦前広島絵、美術品があわせて 700 点。2004 年 8 月より、「平和データベース」を WWW で公開。英文展示の文章が添えてあるものもあるが、日本語からしかは入れない。現在、長崎をタイアップして国立追悼記念館、NHK、中国新聞で資料収集キャンペーンを実施中。しかし原医研との連携は不明。

入館者の一割は外国人。小学生高学年以上を対象とした放射線による被害の展示を拡充。その後館長と面会。館長は役人らしい。現在空襲関連の博物館 9 つが連携して「平和博物館」の構想がある。(広島、長崎、沖縄、埼玉、ピースオーサカ、高松、、、) 各館は学芸 2~3 名程度の規模。データ化を連携中。

「加害、被害の関係」が難しい。5 日後の空撮が米国で発見されたとき、日赤、資料館、原医研等がこぞって入手しようとした。資料館が入手するも、その後同写真が放影研に現存することが判明。資料を統一しようという案はあるが、実現していない。

8月31日、午後5時45分、清水、藤本は放影研を訪ねる。高橋さん、小平さんと雑談。高橋さんからNHKの16mmフィルムの話が出る。丹生先生が1948年から記録を残していた。1984年から85年に木村先生が持っていた。

W. J. Shull氏、‘Song and the ruins’の著者。70歳くらい？放影研の初期を知っているはず。また、高橋さんが昔文藝春秋で投下が8時15分は捏造との記事があったと発言。また、エノラゲイのnaked attackがアメフトのフォーメーションのひとつからきているのではと推論を披露。笹本氏著の「米軍占領下の原爆調査」にABCC設営の由来が書いてありそうで読んでいるところということ。フランス委員会以前に資料を無作為に持ち帰っていたが、一貫性がないため、論文にもならない状態を見てランセットが1947年に設立したことになっている。

4. 9月1日、11時より、牟田学長と面会。

長崎の原医研とはCOEで競争中。大学としての「平和」を考えるため、諮問機関を設定、理念としての平和、将来構想を協議中。また、「平和部会」をつくり、大学の授業としてノーベル平和賞受賞者の講演、学生主導によるシンポジウムの開催を企画している。学生に平和の定義、大学、学問としてなにができるかのレポートを提出させている。広大文書館、館長、司書が広大にある平和に冠する資料をまとめている。平岡氏の資料、前県知事資料、等。

平和学術文庫としてまとめる構想。広大、才賀先生の「過ちは2度と繰り返しません」の元文書が教育学部の教授から広大に寄贈されている。これも学術文庫へ。全国に散らばっている資料をWWWでつなぐことを総研大がプロジェクトとして管轄してくれるのがよろしいとのこと。平和科学研究センターでの資料集め、広島市大の広島平和研究所、関西学院大の平和講座もある。

5. まとめ

各資料館はそれぞれ資料がよく整理されているようだ。どの機関も放影研に莫大な資料が存在すること、それが未整理であることを指摘。厚生省、DOEの体質とのからみがあるようである。

長崎市 長崎原爆資料館

2005. 9. 28

田尾陽一

館長 多以良光善
資料課長 尾上和行
資料係 渡辺栄介

清水 趣旨説明

多以良 壮大な研究ですね。総合大、長崎大、資料館
広島に比べると学術的・・・に低い。広島資料館（畑口館長、高野係長以下
学芸員がいる）

市役所の順繰り（係長以下 3 人）

館長も変わる。

S61 年、被爆調査の拡大。常石氏を知る。

長崎は充分でないか！？

清水 アーカイブ、アーキビスト・・・資料の連けい、必要。

渡辺 長崎のデータベースは、もうらをしているが、一般公開していない。

清水 広島は英文がない。

多以良 長崎のアチコチにすばらしい資料がある。

(総科大平和研、
岡まさはる記念館
長崎大（元・土山学長）
放影研

広島と長崎の連けい不十分（部分的）

尾上 いつ公開するのか不明。プライバシー問題。

多以良 「被爆者健康管理センター」 診断の記録蓄積

森町ハートセンター 6,7 階

・ NASHIM 山下(長崎大)

・ 長崎医療協議会(県)

ここ、1 万点(常設 900 点) ・・・・ 散逸心配

3 ヶ年計画 資料館(長崎、広島)

収集 国立追悼祈念館

長崎 100 点 ←----- 計画 中国新聞、長崎

軍医の写真、ガラス (共同) NHK

証言、遺影

(個人の財産の問題)

被爆の遺構、植物

建造物 ⇒ 保存

防空ごう

厚労省：長崎の建設趣旨クローズアップ→ 国際交流/医療

プライバシー・確認している ⇒ 公開してもらいたくない

(公開する)

(名前、マスコミダメ)

きのご雲の写真・・・アメリカ人の記録—毎日新聞(著作権は日本の会社)

貴重な写真・・・著作権主張が多い

・ 父がとった写真・・・息子が権利主張

放影研

館長2~3回行った

血液検査 被爆健康診断

結果をもらえる

大変な精密さ

受ける動機・・・他に役に立てたい

健康診断のつもり

こういう

ふうにする

拒否反応

協力をした方

→ 被爆2世団体とのとり決め

ソーシャルワーカーもついている 日程調整も親切

→ ステーションワゴンに載せてもらった

20年前には、戸籍チェックをしていた。

→ 長崎と広島の関係

資料の保存(アーカイブ)と情報リンク/情報公開

入館者 70万/年

文書記録 13万人分

_____ 所長、山下課長、陶山部長、林田・・・
(庶務課長)(疫学部、 (原簿管理課)
医学博士)

清水 「戦争と平和」プロジェクト 何をやってもよい。何を落とすどころにするかわからない。

中野 何を知りたかったのか？ 調来助
何の目的のプロジェクトかわからない。 吉沢厚雄
S23年長崎で始まった (ABCC) 医師の証言

常石 個人情報以外のものはないのか。 長崎原爆体験
赤星 線量推計のための物などはある。 まる??出版??
長崎大 白根先生のもの 保存

陶山 システムティックに、正確な暴露要因を調査
放射線の高影響 → 発ガン 急性期ではない
赤星 → 非発ガン

医者 統計学者 ベーシック 1965
サイエンス 19...
2002年改? T65,DS02改訂

所有権 びみょう 資料を調べて各国に送る
長崎・・・仕事の下請け もともと放影研のものでない。別のところにある

“原爆” 1950、 国勢調査 → 被爆者
データアーカイブ 広島・長崎：12万人 (2：1=広島：長崎) → 死亡の追跡
他機関の相互利用 (戸籍、← 法務局)
→ 医療機関に問い合わせ、ガンか死因を調べる
2,3万人/2年 を独自に健康調査 → 紙で残っている
採血データ
1990年代からDNA保存

資料共有はしていない
広島/長崎間は、万一に備え交換

- ・ 人口調査の情報は持っている
- ・ ガンの組織別（医大があった）に死因調査をしてきた。
長崎大医と同じようにもっている
- ・ DS 返還されたものホルマリンのものは長大医に渡した。ブロックのみここに。
- ・ 投下前後の写真はある。日本の国益に利する限り貸出している。
- ・ 個人名入りデータ出版。白根先生、東大出版会・・・急性期症状（古本で手に入る）

赤星 紙のデータ保存

デジタルにはなっていない

陶山 放射線影響に関する展示少ない。（資料館）

田尾 // データのアーカイブ、共有できないか

陶山 のどから手が出るデータ。

所有権で US/日本が関与している。

DOE → NAS を通じて

被爆線量体系 …… 放影研のみもっている

長崎大はしかたなく独自体系

えき学的データ

→ 2、3万人 これ貴重

診察データ

アメリカ手離さない

ガン患者のピーク

2010年

アメリカが軍事目的か平和目的

軍人はすでに中高年

放影研は若年のデータもっている

遺伝学系 → えき学系

デジタル化

1億円でできる

（広島、長崎）

研究体制も

US : 日本 = 1 : 1 で規ボも変動

-
- ・ 見学 調先生 遺品
 - ・ 病理 エキ学

- ・ 内科 カルテ . . . 公開要求があれば見れる 火事怖い、水怖い
CO2 1000万
デジタル化 1億円 コピーが劣化していて大変
診察中 . . . 4~5人 夜
超低温 冷凍庫室
組織資料常温保管室

若年(20歳以下)被爆 → これから 乳ガン
こう甲状腺ガン

長崎大学 齊藤 寛 学長 2005. 9. 29 学長室

医者、カネミ油症学の専門家

清水 人間が戦争をおこす原因 . . . 生物学的理由?

物理班 → 原爆のドキュメント等を残す調査

広島・長崎等 資料を横につなぐ仕事

齊藤 永井/白井/笹山(軍医) . . . 新しい資料 英文出版する
(直後資料)

原爆医療研

ダンボールに入ったもの整理する 金、人ない

経済 . . . 図書館長文館長 ボランティア→長崎奉行時代の文章

日記 おせいぼのリスト

広大 (原医研)

長大 (〃) れんけい 組織としてはない 初めて広島に集まる

放影研 サエキ (ムタ、サイトウ、サエキ、大久保)

放医研(千葉) 記録がインテグレートされていない

大久保

ABCC のデータ、”プライバシー/原爆”の問題を別にしても

人々が長期間保存する意義あり

所有権→アメリカ? 一般の人の老後にも有用

国?

三菱兵器工場での死者 明確にしたい → いれい祭

長崎大内もキャンパス???

ABCC のデータの所有権について

フィールドワークの記録は 研究者のものでもあり

患者のものでもある

DOE、NCI、US 国立遺伝研、LSS を使った研究

研究のために、自由にアクセスできるべき (アメリカで始まっている、
患者記録の例)

公開の所においておく。

記録に協力した患者に申し訳ない (カネミのデータ)

研究者も死んでしまうのだから、きちっと保存

→アーカイヴの重要性

プライバシー→保守 研究者間で統一した考え → 世の中へ 金と人がかかる

総務省・法務省がしゃくしじょうぎ 死因の調査が不可能になってきている

常石 趣旨

アーカイブ

中島 アーカイブマテリアルに興味、収集している。

関根 パラフィンの中に生体材料を見ている。胃の生体材料 解剖

(病理で保存されている) 30~40/1例

臨床カルテは5年まで保存、破棄してよい

遺伝子も使える。→ コンピュータ解析可能

保管/きちんと整理する必要

パラフィンブロックの置き場なくなる可能性→捨てることになる可能性

病理学者として危機感・責任感

中島 2号館3階にFIP パラフィンブロック

病理解剖の症例、 データ登録: S21年~S63年 1万1000例

光ディスクに入っている

被爆の有無

パラフィンブロックを早く見つけて保存の必要

病院ごとに保存されている。 1,961~1999 パラフィンブロック

↓

捨てない

PBのリンケージ出来た

被爆者の同定可能

400万の予算で市内各病院から長大にパラフィンブロックを集める

広島:これから発生する生体を収集 → 長崎なし

これからガンが増加

長崎被爆者の中でタン?ガン⇒ 11,700人 → 増加

ミネ先生が生体外も含めて

関根 国立 祈念館に全体アーカイブ（所在データ）を持たせることになっていた。
被爆前後の写真、解析

中島 長崎大から放影研にいつている人がいる。データを見せられる
共同研究をしていけば。

固定したコンフォート

関根 パートタイムでやっていた

10万人の（ライフスタイルスパン）（LSS 集団 間取り／距離／方向）ライフスパン
空気線量を計算したもの ⇒ 宝物⇒ 公開しない
カーマ (個人情報保護法でより問題に)

対象もっと多い・被爆者
広大の方で作った線量方式を使っている。

長崎は医師会・大学の連携がよかった

広大・原医研は付属研 医学部でない

日本の国の責任だ

国立 祈念館の時、厚生省にいったが、筋が違うという。

ガンバッテクレ

写真がいいかもしれない

遺伝子重要

長崎訪問記

藤本順平

2005年9月28日～9月29日

訪問者：清水、田尾、常石、藤本

1. 平成17年9月28日 午後2時より、長崎原爆資料館を訪問。午後1時半より同館を見学の後、

館長：多以良光善氏(4月より館長、1年ないし2年で移動)

資料係長：尾上氏、

資料係：渡辺氏と面会

当館には1万点の資料が保存されている。うち、908点を展示。台帳あり。寄贈を受けたもののみ公開。

当館は市役所直営のため、職員は市職員の回り持ち。従って連続性に欠く。広島に比べて専門的、学問的な視点が弱いと館長。広島は学芸員が8名、長崎は学芸員無し、3名が最大3年。

追悼記念館に被爆者証言(137冊、13万人分/68万人)、遺影の登録がある。

当方のプロジェクトの説明の後、長崎にある関連機関の説明：

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)(県原爆被爆者対策課)：

<http://www.nashim.org/gaiyou/>

総合科学大学平和研究所：峰助教授

岡まさはる研究所：行政で触れることができない資料等、

被爆者健康管理センター、

市立公文書館

資料保管庫を見学。耐火設備の整った鍵のかかる大部屋に資料が保管されている。被爆したピアノ、寄贈の絵など。十分な広さ。(ここに調査票を保管できるか?)

2. 16時より長崎放影研訪問

赤星氏、陶山氏、他3名列席

会談の当初は構えている感じ。プロジェクトの説明の後の最初の質問は「落としどころをどこに設定しているのか」。説明は主に陶山氏による。

インターネットでの開示あり。他の組織との連携はプライベートに関する問題があり、考えられない。放影研のテーマは後影響(発ガンおよびそれ以外の疾病)に関して1)人口集団(約12万人が対象、内、非発ガン患者は2万3千人、24ヶ月に一回の検診)の正確な把握、2)暴露要因の特定、にある。しかし後者にかんしては統計学者、基礎医学者を必要とし、長崎放影研では扱っていない。前者に関しては県の医師会との協力のもと死亡の追跡等が可能。また本局より戸籍も把握。ドシメトリー(物理線量)は長

崎放影研の守備範囲外。外部物理学者の設定する

T65,T86,DS02等の基づき作業を行うのみ。プレパラート等の保存はある。放影研間の交流はもちろんあり、1990年までDNA解析を行っていた。検査データは電子化されており所内の者は見ることができる。米国からABCCに帰ってきた病理学解剖標本はすべて大学に持っていつている。

広島・放影研片山部長の資料散逸の危惧に対して、長崎大学医学部の永井先生、調先生の日記、手記等が電子化されているとの回答。調査票に関してはID化が図られているとのこと。広島のアーキビスト、マーガレット・アーミーさんの名前も出る。2年前の放射線影響学会でアーカイブが問題になった。しかし、日・米(DOE,NAS)の所有権がからみ容易ではない。線量関係も長崎には若干ある。(広島には大量にある。)ガン患者数のピークは2010年(とくに若年被爆の影響の解明)と推定されるので疫学・臨床データとして今でもDOEは興味あり。予算は落ちかかるが、平行線を保っている。日・米の資金割合は1対1と決められている。

長崎には役員は配属されていない。ひり島・長崎で年間1億の予算で運営。放射線影響に関する長期にわたる観察として意義がある。

4階にある、調先生の資料を見学。調査票5455枚(内、ABCCのものが4520枚)。「長崎における原子爆弾XXの統計的観察」としてまとめられている。また、「長崎原爆体験」(調、吉澤著)がある。(メモには「松林鎭三先生」の名が残っているが、わからず。)同階の別室には、22列のロッカーがあり、中身がはっきりしないものがダンボールに3箱分くらいある。調先生の資料もそれらの中から発見された。カルテは電子化され8ラックに保存。3階は病理検討会議室があり、広島から2名、長崎から1名で被爆者の病理を検討する。スライドはこの階に保存されている。1階には組織資料、血液保存用超低温冷凍室がある。カルテはこの階に保存。一人につき5cmの厚さになっている。火事がおき、水がかけられれば容易に損失する状況。甲状腺ガン、乳ガンは20歳以下での被爆者に発生、と判明した。また放射線の影響は5ミリシーベルトが閾値。広島では半径2600m以内、長崎では半径2400m以内がこれに相当。

3. 9月29日、10時より長崎大学・学長と面会

永井博士、調博士とともに、篠山軍医の診療記録があり、英訳がある。長崎大、広島大、放影研、放医件(千葉)の四者が11月に広島で放射線医学の連携に関して集まる予定。歯池に21世紀COEが残り2年(200億円、300億円)で、その後は不明であること。放射線生物科学として連携すべき。広大、長崎大からは原医研所長、放影研は大久保理事長、放医研からは佐々木氏が出席予定。

学長の意見では、フィールドワークの結果は地域の人々のものであり、特定の機関が保持すべきものではない。研究者の自分のものとするのは間違いである。放影研の60年に及ぶ追跡調査は高齢者保健の観点から開示が重要と考える。被爆者のためだけでなく、不可欠資料と認識している。こうした観点から開示されているデータにカドミウム汚染がある。健康に関するデータはある年数がたつと研究者が離れ、判らなくなるのがよくある。外交文書でも30年でオープンとすることができるのだから、4者とDOE、厚労省で結束し、アーカイブ化を図ることが重要。

長崎大学の成果の一つに、被爆者の多重ガンの割合が一般人の1.5倍であることを明らかにしたことがある。これは60年にわたるデータの蓄積の成果。被爆二世（約40歳）は5万人が登録され、7割が健康診断を継続的に受けている。宮城、広島、長崎の各県では、県の医師会、放影研、医学部の連携により診察した医者からの「ガン登録」が報告され、死亡診断書の閲覧が可能。（最近の行き過ぎた個人情報保護法の適用により疫学研究が成り立たなくなる恐れあり。）

公衆衛生管理局の予算、1200億円/年の大半は広島・長崎の被爆者のためのもの。この点からも被爆者自らが開示を要求すべきかもしれない。砒素ミルクの事件では検診の記録をオープンにした。

多重ガン、及び二世の研究はあと50年(3世に及ぶ)は続けて検診をすべきであり、日本政府の方針でもある。

まとめ：長期追跡研究としての被爆者検診の重要性が放影研、長崎大学で独立に語られた。この観点からしても検診データの初期からのアーカイブが不可欠であり、これに向けた（4者+DOE+厚労省）の連携を早く確立することが望ましい。

原爆資料データアーカイブセンター*

*被爆資料データアーカイブセンター

目次

- 1 基本構想
- 2 戦略目標の設定
- 3 構造的阻害要因の分析
- 4 推進軸の設定
- 5 推進課題の整理・分析
- 6 仮説デザイン
- 7 今後の課題、アクションプラン

1 基本構想

- 1945年8月に、人類史上初の一般市民生活圏を対象とする核兵器の使用という「大量無差別な人間を対象とする放射線照射“テスト”」が実行された。
- 以来60年間、放射線照射後の大規模人間集団の医学的観察・治療が遂行され、今日におよんでいる。
- また、破壊の実態を示す多くの物・記録・写真等が存在する。
- この資料・データは、日本・アメリカ・その他の各機関・組織が保有し、それぞれの個別理由により保存・利活用状況はバラバラである。
- 日本人は、自らが体験したこれら資料・データを、一つにまとめ、長期に国際的に人類に役立てるために、原爆資料アーカイブセンター*を設立する責務を持っている。

*被爆資料データアーカイブセンター

2 戦略目標の設定

- (1) 広島・長崎の原爆関係の全ての情報を収集管理する。
 - 原爆開発時の世界状況、原爆の開発状況、開発者の意識等の正確な情報を整理する。
 - 原爆爆発時の放射線(中性子線、ガンマ線、等)と熱線・衝撃波等の伝達状況の整理。
 - 被爆状況、被害状況の整理。
- (2) 原爆の医学的、環境的、文化的等の影響を、科学的に整理する。
- (3) その他世界各国の原爆・原爆関係の被爆資料も対象とする。
- (4) 放射線被爆関係の全ての情報を、人類共通の遺産として永久に保管し、世界のあらゆる関係事案に対し、信頼性のある情報提供を行う。
- (5) 世界のセンターとして、放射線被爆に対する迅速な医療対応を行える体制を整備する。
- (6) 軍事利用目的を除いて、あらゆる公開された研究活動に対し、支援をおこない、その成果のアーカイブと相互協力を推進する。

3 構造的阻害要因の分析

- (1) 広島、長崎を中心に原爆関係の医療機関、資料館、運動体等が活動しているが、各組織の持っている貴重な資料・データが横断的に整理・アーカイブされていない。
- (2) 各組織の状況は、財政的・人材的に弱体化の危機にある。
- (3) アメリカ・日本の共同管理である放射線影響研究所の保有するデータは、科学的に極めて貴重であるが、日本としての明確な長期戦略がないために大きな課題となっている。

4 推進軸の設定

(1) 原爆関係資料・データの全体所在状況をつかむ。

広島 広島大学原爆放射線医学研究所、広島大学平和科学研究センター、広島市立大学
広島平和研究所、広島市広島平和記念資料館、国立平和祈念館、放射線影響研究所
長崎 長崎大学原爆医療研究所、長崎大学医学部原爆後障害研究施設、長崎市原爆資料館、
国立平和祈念館、放射線影響研究所
京都 立命館大学平和ミュージアム
東京 理化学研究所仁科博士関係資料
US 国立公文書館、テキサス大学、National Security Archive,,,,,,

(2) 放射線影響研究所の資料データの状況把握と何をどこまで整理できるか、 人材と費用見積もり。

内容目録の整理、所有権・知財権・個人情報保護問題等、アーキビストの確保、デジタル化費用

(3) トータルデータベースをつくる場合の問題点抽出

各組織の参加協力における課題抽出、

5 推進課題の整理・分析

(1) 調査結果の整理・分析

これまでの調査報告書の集約・内容整理・分析

(2) 関係者のヒアリング・討議内容の整理・分析

議事録の整理

(3) 関係文献・映像・資料の整理・分析

購入図書の一覧整理、戦略課題に則した整理・要約、

(4) セミナーの計画的設定による課題の整理・分析

原爆関係に絞った小規模セミナーが必要

(5) 既存関係機関の方針・限界・力関係の分析

現在の問題・課題が何故既存組織で解決できないか等を明確にする。状況を把握している
人物とのコンタクト・協力の取り付け。

(6) 推進力となる有識者のネットワーク化

6 仮説デザイン

- (1) 広島市に新しいセンターとして設立。
- (2) 全世界の専門科学者・医療関係者・ボランティア をスタッフとして結集。
- (3) 設立運営費用は、日本政府、各国政府、国連、世界各国の市町村、民間組織、民間企業、個人から集める。
- (4) 運営は、人類の安全確保を目指す新しい平和研究機関。
- (5) アーカイブされた資料・データは、戦争・紛争への使用目的以外に原則公開する。プライバシー保護に留意する。
世界中の戦争・テロ・事故による放射線被爆に対し、医療支援・保全手段指導・その他情報提供支援を行う。

7 今後の課題、アクションプラン

- (1) 3月までの調査計画
広島市立大学広島平和研究所、立命館大学平和ミュージアム、国立博物館(仁科記念財団関係)、アメリカの研究機関・公文書館など。
4者会議の動向、協力者ネットワークの拡大。
- (2) 分担と体制
全体報告書、実地調査、文献調査、折衝、他
本計画書を骨子として、ドキュメントデータベースを、
heiwajournal.kek.jpに構成する。3月セミナーにおいては発表する。
- (3) 3月セミナー講師案。メインは藤本順平、他に1人ぐらい。候補 高橋博子氏(phistic)、モンテカセム氏(全般)
- (3) 新規メンバー(案)
荒船次郎、若林一平、若手(大学院生、アーキビスト、ワーカー)
清水氏が声をかける。
- (4) 定例会議、作業スケジュール

原爆資料アーカイブズセンター(仮称)構想試案

現状

- 1945年8月に、人類史上初の一般市民生活圏を対象とする核兵器の使用という「大量無差別な人間を対象とする放射線照射“テスト”」が実行された。以来60年間、放射線照射後の大規模人間集団の医学的観察 治療が遂行、記録が蓄積され、今日におよんでいる。
- また、破壊の実態を示す多くの物・記録・写真等が存在する。
- この資料・データは、日本・アメリカ・その他の各機関・組織が保有し、それぞれの個別のおよび研究上の理由により保存・利活用状況はバラバラである。
- 日本は、自らが体験したこれら資料・データの情報を、一つにまとめ、長期に国際的に人類に役立てるために、原爆資料アーカイブズセンターを設立する責務を負っている。

対応：研究資料から国民の資料へ

放射線被爆関係の全ての情報を、人類共通の遺産として永久に保管し、世界のあらゆる関係事案に対し、信頼性のある情報提供を行う。

- (1) 広島・長崎の原爆関係の全ての資料の情報を国民の財産として収集管理する。各研究機関の
 - 活動記録(組織の設置、意志決定)
 - 一般資料(人事、会計、庶務)
 - プロジェクト資料(事業記録、研究データ、収集資料等)
 をアーカイブズの対象とする。
- (2) 原爆の医学的、環境的、文化的等の影響を、科学的に整理する。
- (3) その他、世界各国の原爆・原発関係の被爆資料も対象とする。
- (4) 世界のセンターとして、放射線被爆に対する迅速な医療対処を行える体制を整備する。
- (5) 軍事利用目的を除いて、あらゆる公開された研究活動に対し、支援を行い、その成果のアーカイブズと相互協力を推進する。
- (6) 科学的基盤である放射線影響研究を強化推進する。
- (7) サイト候補については関係研究機関の協議により決める。

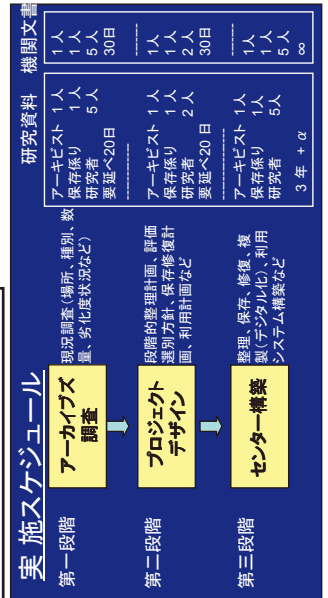
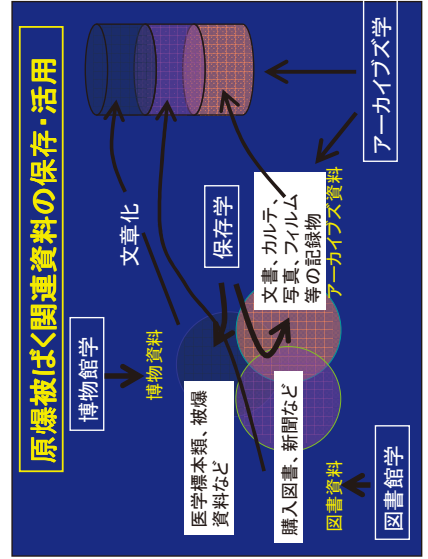
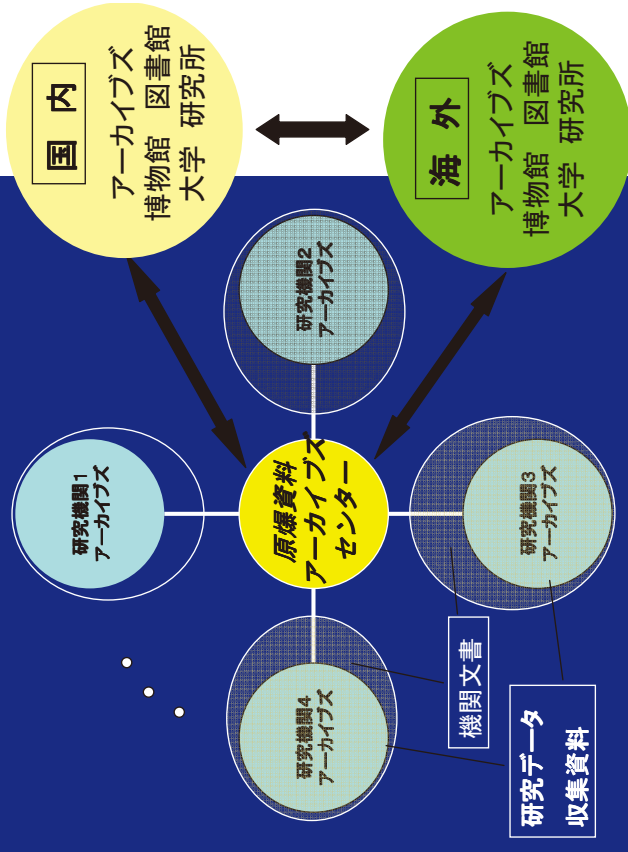
原爆資料アーカイブズ経費(案)

アーカイブズセンター建設等初期費用	:30億円
各機関準備金	:1.5億円/機関
アーカイブズセンター維持費	:15億円/年
各機関維持費	:1.5億円/機関/年

総合研究大学院大学・「戦争と平和」研究グループ作成

アーカイブズとは“平和と民主主義のための記憶装置”

- 過去を忘れず、あやまちをくり返さない(=平和のために)
- ・行政、軍隊、企業、団体の記録(戦争と平和)
- ・個人の生活や闘いの記録など
- 人間としての権利を保障し安全な生活を守る(=民主主義のために)
- ・行政の記録(住民福祉、年金記録!)
- ・企業の記録(薬害、欠陥自動車の情報隠し!)



原爆資料アーカイブズセンター(仮称)構想試案

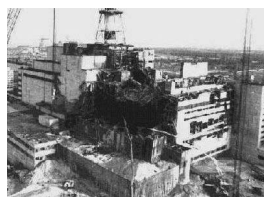
現状

1945年8月に人類史上初の一般市民生活圏を対象とする核兵器の使用という「大量無差別な人間を対象とする放射線照射“テスト”」が実行されました。その1年後には米国によって原爆傷害調査委員会(Atomic Bomb Casualty Commission ABCC)が設立されました。

しかし、「調査はするが治療はしない」との批判を浴び、1975年、ABCCは日米折半の共同運営、**財団法人「放射線影響研究所(放影研)」**に改組されました。以来、寿命や成人の健康、被爆者の子供に関する調査が継続して進められています。

- 放影研、広島大学、長崎大学、放医研(放射線医学総合研究所)など関係機関の調査研究の結果は、世界一級の資料として活用されてきています。

- チェルノブイリ原発事故においては、放影研で開発された甲状腺の検査機器によって、多くの人々の検査・治療が行われました。



チェルノブイリ原発事故

- これらの調査研究のために悲惨な破壊の実態を示す多くの生体資料をはじめ物・記録・写真等が収集されました。しかし現在、整理や電子化する資金も十分になく、焼失の危機のみならず、老朽化した建物での消火作業による損壊や喪失の恐れにさえ直面しています。また、未だ貴重な資料が段ボール箱の山に埋もれており、文字通り風化しつつあります。



イメージ図


対応 : 研究資料から国民の資料へ

日本政府のもと**国立原爆資料アーカイブズセンター**を設立し、放射線被曝関係の全ての情報を人類共通の遺産として永久に保管し、世界のあらゆる関係事案に対し、情報の保護に十分留意しつつ、信頼性のある情報提供を行うことを提案いたします。

- 広島・長崎の原爆関係の全ての資料の情報を**国民の財産として集中管理**し、各研究機関の活動記録(組織の設置、意志決定)、一般資料(人事、会計、庶務)、プロジェクト資料(事業記録、研究データ、収集資料等)もアーカイブズの対象とします。
- 世界と連携して、放射線被曝に対する迅速な**医療対処を行える体制を整備**します。
- 世界中で原発の建設ラッシュとなっています。予想される事故に対して有効なデータを保有する国として、日本が国際的に果たす役割は今後増加します。これを推し進めるには、科学的基盤である**放射線影響研究の強化推進**が不可欠です。


原爆資料アーカイブズ経費(案)

アーカイブズセンター建設等初期費用	:30億円	アーカイブズセンター維持費	:15億円/年
各機関準備金	:1.5億円/機関	各機関維持費	:1.5億円/機関/年



アーカイブズ学の動向と 科学情報資源の保存・ 活用方法のあり方

人間文化研究機構 国文学研究資料館 アーカイブズ研究系
総合研究大学院大学 文化科学研究科
安藤 正人

- 
1. いまアーカイブズが新しい
 2. アーカイブズ学とアーキビスト
 3. 「原爆アーカイブズ」に期待する

1. いまアーカイブズが新しい

アメリカ合衆国の巨大な「記憶装置」
＝ナショナル・アーカイブズ(国立公文書館)





ARCHIVES II (College Park, Maryland)

日本のアーカイブズ

National Archival Institutions

国立公文書館、外交史料館、防衛研究所図書館、国会図書館憲政資料室など

Municipal Archives

藤沢市文書館から神奈川県寒川町文書館まで約20数自治体

Prefecture Archives

山口県文書館から福井県立文書館まで約29都道府県

Audio-Visual Archives

NHKアーカイブス

University Archives

京都大学文書館

Institutional Archives

高エネルギー加速器研究機構史料室

Business Archives

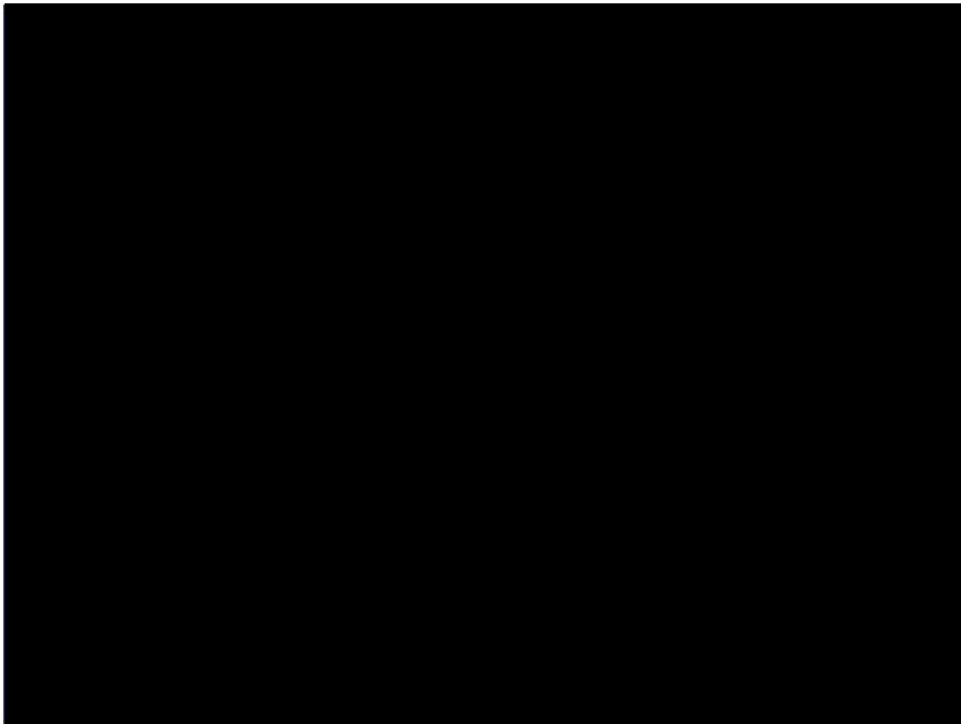
日本銀行アーカイブ

Religious Body Archives

佼成文書館



参考) NHKアーカイブズ画面



参考) 日本における建築 アーカイブズの構築に向けて
2007年3月
(社) 日本建築学会 建築アーカイブズ小委員会 冊子表紙

参考記事

「脚本アーカイブズ会館の設立を！」

（『読売新聞 夕刊』 2006年11月28日）



アーカイブズ： 2つの流れ

①組織記録の保存・公開

- ・主として行政機関や企業
- ・情報公開やアカウントビリティ→ 透明性

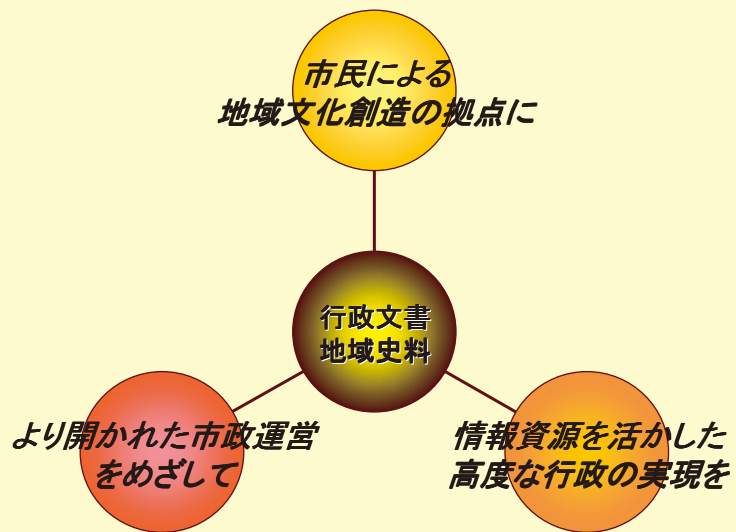
②ある特定分野の記録保存

- ・組織内記録だけの場合と収集を含む場合とがある
- ・過去を記憶することの大切さの再認識

→アーカイブズの本来の役割は両方



天草アーカイブズの三つの理念



アーカイブズとは
“平和と民主主義のための記憶装置”

□ 過去を忘れず、あやまちをくり返さない
(=平和のために)

- ・行政、軍隊、企業、団体の記録(戦争と平和)
- ・個人の生活や闘いの記録など

□ 人間としての権利を保障し安全な生活
を守る(=民主主義のために)

- ・行政の記録(住民福祉、年金記録！)
- ・企業の記録(薬害、欠陥自動車の情報隠し！)



2. アーカイブズ学とアーキビスト

アーカイブズ学とは？

archival resource studies
アーカイブズ資源研究

歴史情報資源学 historical information resources
(史科学、記録管理史など)
現代記録情報学 modern recorded information
(組織体情報論、電子記録論、オーラルヒストリー等)
その他

archives administration
アーカイブズ管理研究

アーカイブズ政策・制度論 archival policy & systems
記録管理論 records management
記録評価論 archival appraisal
記録史料調査論 archival survey
編成記述論 archival arrangement & description
アーカイブズ情報学 archival informatics
保存修復学 preservation and conservation
その他



Science of Archives, 2003

日本アーカイブズ学会 設立大会

日時 2004年4月24日(土)・25日(日)

場所 学習院大学 西5号館 B1教室

2004年4月24日

13:30～15:30 設立総会

16:00～17:30 記念講演

「未来の時は過去の時のなかに
—21世紀のアーカイブズ学—」



エリック・ケテラール氏
アムステルダム大学教授
元オランダ国立文書館長
(通訳あり)

18:00～20:00 懇親会(輔仁会館1階)

会費 3,000円(当日受付)

2004年4月25日

設立記念シンポジウム

アーカイブズ学を拓く

10:00～17:00

青山英幸氏 (北海道立文書館)
「アーカイブズ—エビデンス、ヒストリカルドキュメント、ヘリテージ」
キム・イハン氏(金翼漢)(韓国明州大学記録管理学科)
「学際研究としての記録学とアーキビスト教育」

保立道久氏 (東京大学史料編纂所)

「歴史学とアーカイブズ連携」

永田治樹氏 (筑波大学図書館情報学系)

「パンダ・シンドロームの脱却—図書館情報学の再構築」

水嶋英治氏 (常盤大学大学院コミュニケーション振興学研究所)

「資料認識とナレッジ・マネジメント—博物館情報学の立場から」

パネルディスカッション

コーディネーター 安藤正人氏 (国文学研究資料館史料館)

日本のアーキビスト教育

勧告

・国際アーカイブズ評議会(ICA)

1986 ICA報告「日本における文書館発展のために」

・日本学術会議

1988、1991「公文書館専門職員」の養成体制について報告

現況

(1) 人間文化研究機構国文学研究資料館アーカイブズ研究系

「アーカイブズ・カレッジ」(6週間コース、1週間コース)

(2) 国立公文書館

「公文書館等専門職員養成課程」等

(3) 企業史料協議会Business Archives Association

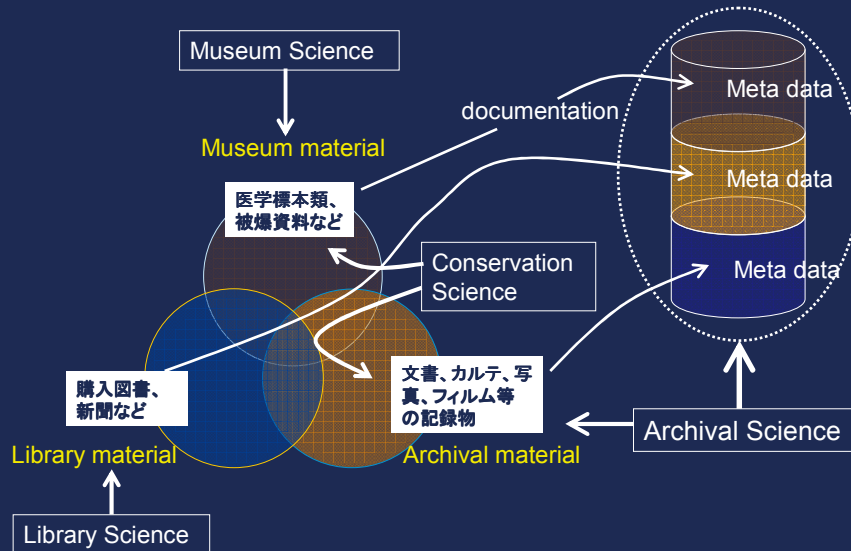
「ビジネス・アーキビスト研修課程」

(4) 大学・大学院の関連コース

東京大学(文化資源学、情報学環)、お茶大・駿河台大・別府大など
学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻設置(2008.4)

3. 「原爆アーカイブズ」に期待する

原爆被ばく関連資料の保存・活用：アーカイブズ学からの提案



Archives Project ~Institutional archivesの構築~

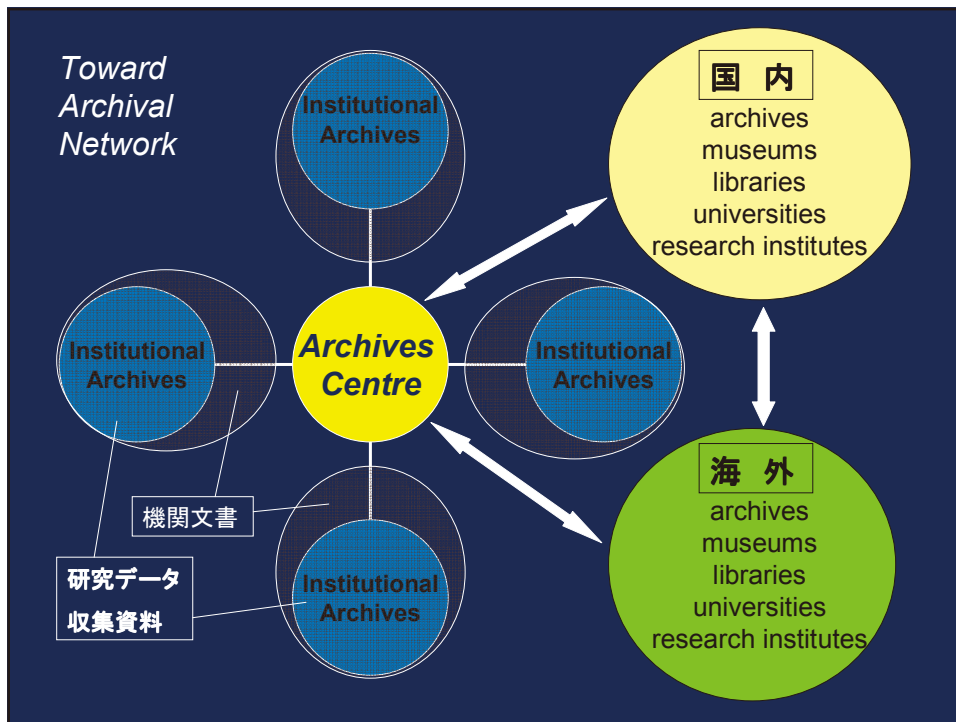
対象



Archives Project ~Institutional archivesの構築~

実施

			研究資料	機関文書
1st stage	Archival survey	現況調査(場所、種別、数量、劣化度状況など)	Archivist 1 Conservator 1 Researcher 5 20 days	1 1 5 30
	↓		-----	-----
2nd stage	Program design	段階的整理計画、評価選別方針、保存修復計画、利用計画など	Archivist 1 Conservator 1 Researcher 2 20 days	1 1 2 30
	↓		-----	-----
3rd stage	System construction	整理、保存、修復、複製(デジタル化)、利用システム構築など	Archivist 1 Conservator 1 Researcher 5 3 years + α	1 1 5 ∞



THE HERITAGE OF THE PAST IS THE SEED THAT BRING FORTH
THE HARVEST OF THE FUTRE

(過去の遺産は未来の収穫をもたらす種子である)

資料 8

第 1 回放射線影響研究機関協議会 議事要旨

177-180 頁

資料 9

第 2 回放射線影響研究機関協議会 議事要旨 (案)

181-184 頁

資料 10

第 3 回放射線影響研究機関協議会 議事要旨

185-186 頁

資料 11

放射線影響研究機関協議会 第一回ワーキンググループ 議事要旨 (案)

187-190 頁

2009年2月3日

NARA カレッジパーク

参加者:安藤、高橋、前川

史料群:RG243、Series 41:US Strategic Bombing Survey Index & Cross Reference
(戦略爆撃調査団関係資料)

Finding Aid: The United States Strategic Bombing Survey, “Index to Records of the
United States Strategic Bombing Survey”, June 1947 (高橋さんが紙コピー済)

調査ファイル:3.g-3.vのうち3.vのみ

- * 請求する際は、写真資料を含むことを強調する。通常はマイクロフィルムをみるので、オリジナルの地図、写真、設計図をみたいことを強調すること。
- * Finding Aid のファイルナンバーは、配架場所を示す通常の請求方法と異なる(設計図や写真資料などを含むため、別置されているため)
- * 安藤先生は異なる史料群を調査した、詳細は安藤先生のメモを参照のこと。

請求した資料

Finding aid(p.72)

3.v. Field data pertaining to physical damage- Nagasaki: (配架場所は **Stack Area 190; Row D; Compartment 6-7; Shelf 6-1, Box. 77-86.**)

- (1) Mitsubishi steel and small arms works
- (2) All remaining buildings between M.S. and S.A. loop in river and R.R.tracks
- (3) Mitsubishi TURbin component works I.
- (4) Standard Vacuum Oil works
- (5) Kyushu gas works
- (6) Vrokumi gas works
- (7) Bridges and docks
- (8) Mitsubishi Turbine component works II.: Box 79 2/3
(デジタル写真: P1180331-P1180337)
- (9) Mitsubishi torpedo works: Box79 2/3
- (10) Leys Normal school.
- (11) Nagasaki Prefecture prison: Box 80 2/3
- (12) Structure between “probable barracks” and Urkrami gas works Box 80 2/3(長崎
県庁? 建築課? 貯水場、学校などインフラ)
- (13) Engineering school
- (14) Divinity school.
- (15) Catholic church

- (16) Nagasaki Medical school
- (17) Nagasaki University hospital (Mitsubishi)
- (18) Zenza grade school
- (19) Nishizakamachi grade school
- (20) Nagasaki commercial school
- (21)

* 作業の風景(デジタル写真:P1180338-P1180345)

* Finding Aid: Guide to Japanese War Crimes(デジタル写真:P1180172-P1180330)

* 戦略爆撃調査団の資料はすでにマイクロ化されて、日本の国会図書館、広島などにもマイクロが所蔵されている。今回は現物資料(地図、写真ほか)をサンプル的に確認した。戦略爆撃調査団のプロジェクトに関連して生成された資料である。アイテムレベルの出所や来歴などは不明なことが多い(日本語で作成された建築の設計図、原爆投下後の建物の被害状況、建物やインフラの所在地のスケッチで英語のメモが記載されている資料など)。日本語の資料は、県庁の建築課?に保存されていた?設計図のような印象。

3.g-3.1 は前川が請求

3.m-3.u は高橋さんが請求

* どちらも配架場所が違っていたためか、時間がなくて請求しても出てこなかった。3.v の棚と同じ配架と考えて請求したが、小さなアーカイブズ箱に入っている可能性が高く、別置されている模様(担当アーキビストの話から)

2009年2月4日 午前 National Academies Archives

The National Academy of Sciences, Archives Archives@nas.edu

所在地: National Academies Archives, 2110 Constitution Avenue, NW, Room
NAS 234, Washington, DC

郵便住所: National Academies Archives, 500 Fifth Street, Room NAS 234,
Washington DC, 20001

調査参加: 安藤、加藤、高橋、前川

担当者: アーキビスト Daniel Barbiero dbarbier@nas.edu tel: 202-334-2414

* 文書中の番号は前川が撮影したデジタル写真データ番号(高橋さんに2月7日データ一括済)

史料群名: Atomic Bomb Casualty Commission 1945-1982**来歴と概略:**

資料の出所は2か所で、ワシントン DC 及び日本(広島・長崎)である。1960年代後半に ABCC の組織的活動がいったん区切られたのち(ending operation)、米国に送られた(1st shipment to US)。1975年 ABCC が RERF に改組した際にも米国に資料が送られている(2nd shipment to US)。RERF の資料はコレクション対象ではない。

資料はキャビネット式のファイル形式で National Academies に移管されたのち、長く同じ状態で保管されていた。アーキビストは当時7名ほどいたが、現在の2人のアーキビストのうち歴史関係のアーカイブズを担当する Daniel Barbiero が、長期保存を目的とした中性紙ファイルへの入れ替えと同時に、原秩序を維持しつつ編成し、目録を1993-1994年に作成した(2009年2月現在、デジタル写真撮影済:P1180358-P1180362)。

資料の原構造は次のとおり。1993年までは、5列のキャビネットに保管されていた(デジタル写真撮影済:P1180367)、以上の2回に分けられて日本から米国に送られた資料はキャビネットの中で原秩序を構成していたものと思われるので、ABCC の一つのコレクションとして中性紙に入れる過程で編成をした。(以上、Daniel Barbiero の聞き取りから)

訪問調査の概要:

今回は ABCC 資料の概要およびサンプル調査を行った。資料はワシントン DC の ABCC 本部および広島・長崎の機関資料および収集史料(国会議事録や新聞報道などの翻訳も含め)から成立し、また ABCC は National Academy of Science の下部組織であるので、組織間の往復文書、日本大使館との往復文書などからも構成される。今回は1960年代末ころの組織存続に関する組織問題(機関の統廃合)、日本政府からの拠出金のバランスや日本の世論および科学者の協力状況など、組織に関する資料を中心に概要を調査した。収蔵庫内の見学(2階のアーカイブ室、1階の収蔵庫の様子を見学、デジタル写真撮影済)のほか、収蔵庫見学の際に気がついたコレクショ

ン (Division of Medical Sciences 1940-1945: Coms on Military Medicines Minutes (Bulletins) & Reports を高橋さんがサンプル調査(デジタル写真:P1180371-P1180373)。

サンプル調査と目録からは、出所の異なる史料(例えばワシントン DC の科学アカデミーとワシントン ABCC?)が時系列に並べなおされている印象をうける。例えば、保存の観点からクリップや綴じを外した際に、文書の参考資料などの添付文書などもきれいに時系列に並べ替えられているようなので(実際の事務的な文書の原秩序が維持されている場合は、添付資料の日付などは多少前後することを繰り返す)、今後、各ファイルの出所および(再)目録化の過程で加えられた可能性のある編成についても考慮する。本コレクションは、ABCC の組織文書に当たる。そのため、日本から米国への資料移送、米国から日本への資料返還に関する内部文書や返還目的やリスト内容などの理解に重要であると考えられる。

今後の見通し:

建物の改装のために、アーカイブズは2年近く閉室する予定。半現用の記録を担当する Janice Goldblum (女性のアーキビスト)によると2009年6月ころまでならまだ閲覧が可能ではないかとの情報。当面は、高橋さんのコピーして持ち帰った部分の目録との照合する作業と並行してもう一度調査するか、再訪のタイミングを待つかという状況。

2009年2月4日請求

*資料の請求は、高橋さんが前回訪問した際にコピーした Daniel Barbiero の編成した目録を使用。

Box 63 前川

Box91 加藤

Box92 高橋

Box 99 安藤

Box 100 前川、安藤

Box 63 (デジタル写真撮影:P1180374-P1180379)

- ・ABCC の研究助成で研究を行った研究者(日本人、外国人)の研究成果報告論文、コメント(英語・翻訳)
- ・日本学士院からの報告書1951年(英語・翻訳)
- ・合同調査団?(日本人と米国人?)の集合写真、広島・長崎の被爆後の建物被害などの写真(NARA で被害報告と図面のあった建物などと類似)ほか(Dr. Henshaw 氏が撮影)

Box 100 State Department and American Embassy in Tokyo 1964-1972

ファイル数1~8(?)

*時間がなかったので、私は 1964-66 年ファイルだけみて、安藤先生が 1972 年をみる(安藤

先生の手書きメモを参照)。1965～1971年のファイルは今回は見なかった。

ファイル①: State Department and American Embassy in Tokyo 1964-1966(前川)

デジタル写真撮影 P1180380-P1180391)

1962.2.25, Amembassy Tokyo to Department of Science Attache's officer アサノシンスケからの日本の学術科学研究費の予算の大枠について聞き取り、アメリカは日本が **biomedical activities** に関してはあまり予算措置がとられていないことを重視する結論を報告

1964.3.25 原爆傷害調査委員会 Director, George B Darling, Dr. to Mrs. Edwin O.Reischauer、ライシャワー氏の健康状態悪化についてのお見舞

1964.4.13 Confidential letter from Herbert N. Gardner, Executive Secretary ABCC, to Dr. George Darling ABCC 日本側の ABCC 存続についての米日予算拠出のバランスについて問題視していること、これについて慎重に進めるべきことについて(**デジタルカメラ撮影**)

1964.4.14 Confidential G.B. Darling, Director ABCC to Mr. Herbert N. Gardner, National Academy of Science ABCC の予算措置について米大使館の Science Attache にアプローチしている

1964.4.27. M.E. Rappaport,, ABCC, MCAF, Navy, San Francisco, Memorandum, “Visit with Labor Attache, Merican Embassy” ABCC 内の労働組合について、広島(日本)とアメリカの経済と賃金格差の問題に関する覚書

1964.4.27 Memorandum for record, “Meeting at American Embassy-14 April 1946”

1964.5.7 Confidential letter from George B. Darling, Dr. P.H. Director ABCC to Mr. Herbert N. Gardner, National Academy of Science, Washington D.C. ABCC の予算の問題、日本政府の対応。Dr.吉田(日本政府は ABCC に拠出金を増やして研究内容を日本側がコントロールできるようにすべきと主張)と日本人研究者たちの関係について分析(p.9) また米国は ABCC 存続主張は米国の moral obligation とは関連がない、また二つの大学病院を建てるという計画を日本への gift として取り引き済み(**デジタル撮影済**)

1964.7.1 Note on Meeting at U.S.Embassy, (Embassy, ABCC(Dr. Darling), NAS, AEC) 米国が ABCC を支援するのは、共産圏が原爆被害のデータを利用できる環境を言質で抑止するため、UN の Academy Science の分野にとっても重要、など組織問題についての話し合い覚書(デジタルカメラ撮影済)

1964.9, Foreign Affairs Manual Circular Federal Interagency Struggle に巻き込まれないか

2009年2月5日(木) 午前 Otis Historical Archives, National Museum of Health and Medicine, Armed Forces Institute of Pathology (AFIP)

所在地: Otis Historical Archives, National Museum of Health and Medicine, Armed Forces Institute of Pathology, Washington, DC 20306-6000

連絡先: tel:202-782-2212; fax: 202-782-3573

<http://nmhm.washingtondc.museum/collections/archives/archives.html>

調査者: 高橋博子、前川佳遠理

担当者: Michael Rhode, Archivist; Katheleen

* 文書中の番号は前川が撮影したデジタル写真データ番号

史料群名: Atomic Bomb Material 1945-1973

史料群番号: OHA 104

Finding Aid:

http://nmhm.washingtondc.museum/collections/archives/asearch/afinding_aids/abomb/abomb.html (2009年2月現在)

訪問調査の概要:

2月2日(月曜日)の調査に引き続き、5日は二人で調査した。今後の調査情報共有のために、National Academies Archives 所蔵の ABCC 史料群の目録のコピーを、アーキビストのキャサリンにあげた。組織資料のうち、日本への返還に関連する資料をサンプル調査した。本メモは高橋さん、前川の調査のうち共同でとったメモで、高橋さんのとったメモも参照のこと。

今後の見通し:

軍図書館 military library の他に、博物館およびアーカイブズが併設されている機関である。日本への返還資料の内訳については、下記の **Box 14-ファイル 1: Master copy part 1. (1972)** と **Box 17 Master listing cross reference ABCC and JANC Specimen Numbers, in 4 parts. (4 parts, 1/4-4/4)** を比較することが検討される。これにより、特に1960年代末にあったと考えられる返還資料の内訳および1972年に返還されずに持ち越された AFIP 所蔵の合同調査団の資料もしくは1945年以降に日本で収集した資料の内訳について理解が進む可能性がある。

最近の関連資料の移管については次のとおり。近年、軍図書館が廃棄した図書および資料を博物館およびアーカイブズが accession した。2月2日(月)に Dr.ハンセンの個人ペーパー寄

贈の希望について、Dr.ハンセンの姪から AFIP の Otis Archives に連絡があった。Dr.ハンセンの個人資料が寄贈されて仮整理が進むころ(2～6か月)に再度メールなどで連絡をとって所在を確認することも検討される。

まずは高橋さんがこれまで複写をして持ち帰った資料を、当館の目録と照合して、日本でできる作業を確定したい。

2009年2月5日請求

Series IV: Joint Army-Navy Commission (JANC) 1973 Transfers, Box14, 17, 18, 19

Box14: A list of JANC, material returned to the Government of Japan-Nov 1972 –in 2 parts. (includes a list of titles of photographs and lantern slides with H and N prefixes) (前川)

・Box14 は、ファイル1、ファイル2から成る。(画像 P1180403-P1180405)

・Box 14-ファイル 1: Master copy part 1.

1972年にAFIPから外交ルートを通じて日本(当初、移管先は広島大学医学部のみ)に返還する合同調査団の調査資料のマスターリスト。

*表紙-p.190(デジタルカメラ撮影済 P1180406-P1180606) *p-191-最終頁までは撮影が終わらなかった。

・Box 14-ファイル 2: Master copy part 2

JANC listing of materials for transfer to Japanese government, November 1972

1973年の返還に関する米日関係往復分徐軍、返還に関わる新聞報道、写真なども含む。1960年代最後に日本に返還された資料については、所在や経緯についてあいまい。1971年12月の通常国会で、共産党の上田哲から佐藤栄作首相への質疑で、1960年代終わりの被爆者の資料の所在と経緯について触れている。佐藤首相は、厚生大臣、外務大臣に照会する旨答弁だった。

・1971 12/20-1973 4/16 の資料は Excel シートに目録 14-2-0~14-2-25 をとった(参照: 20090205 DC AFIP.xls 前川作成、高橋さんに一括済)

・1973 4/6-1973 6/13 の資料は、写真を含む。1972年の外交ルートを通じた返還について準備から終了までの過程を示す日米往復書簡のほか、AFIPでの返還準備作業の様子や返還の際の式典の写真、日本での新聞報道などについて報告。

*目録をとる時間がなかった。高橋さんのビデオカメラで、ぱらぱらめくるかたちで写真資料など、概要を撮影した。

Box 17 Master listing cross reference ABCC and JANC Specimen Numbers, in 4 parts.

(4 parts, 1/4-4/4) (高橋)

返還に当たっての所蔵および病理標本など管理資料のクロスレファレンスのリスト(AFIP の accession number 管理番号 35?????-377061)。1968年10月にすでに日本に返還済とチェックされている資料がおおい。第五福竜丸の久保山愛吉の病理標本も AFIP にあったが、1968年にすでに日本に戻っている。1973年の返還は日本政府との間で、返還交渉が外交ルートであり、その成果が大きく報道されている。

4部に分かれたリストのうち、サンプルとして初めの1部のみ紙コピー複写した。その他は、高橋さんのビデオカメラで撮影し、前川が撮影で説明を加えている。

Box 17, 1/4: 高橋さん紙コピー複写

Box 17, 2/4: AFIP accession number 350077-359999 (コピー複写していない)

Box 17, 3/4: AFIP 360000-379997(コピー複写していない)

Box 17, 4/4: AFIP 369998-377061(コピー複写していない)

Box18: Number lists (高橋)

銀色の箱(通常のアークाइブズ・ボックスより若干大きい)

Box18 はファイル1～6から成る

Box 18-1: Master file number

名前なども記載されている。全体を高橋さんのビデオカメラで撮影

Box 18-2: Hiroshima ひとの名前とアクセッション・ナンバー

Box 18-3: Nagasaki ひとの名前とアクセッション・ナンバー

Box 18-4: Neel-Snell

Box 18-5: Joint Committee ひとの名前とアクセッション・ナンバー

Box 18-6: 広島大学医学部出版の報告書(青い本)『原爆被災学術資料に関する報告』

Box19: Transfer Lists and Memoranda (高橋)

内容は Box14 の Master Copy part1, part2 の紙複写、内容は高橋さんのメモ参照

Box19 はファイル1～3から成る

Box 19-1 Case Materials Listing

Box19-2. Transferal Memoranda (1999年調査の際高橋さん紙コピー済)

Box19-3 Photographs of Trasferral

以上

2009年5月18-20日

The National Academy of Sciences, Archives 米国科学アカデミー

所在地: National Academies Archives, 500 Fifth Street, NW

連絡先: tel: 202-334-2418, Fax: 202-334-1580

調査者: 前川佳遠理

担当者: Daniel Barbiero, Archivist dbarbier@nas.edu (歴史資料担当)

Janice Goldblum, Archivist JGoldblu@nas.edu (現用文書担当)

Archives@nas.edu (National Academies Archives)

* 文書中の番号は前川が撮影したデジタル撮影画像データ

2009年5月18日午前

1. ABCC 関連資料 情報共有化の提案

担当者の Daniel Barbiero, Manager, Archives との話し合いは以下の通り。

- (1) 前回(2009年2月)のグループで訪問調査および収蔵庫見学した後、概要について日本で数回にわたってメンバーと意見の交換および広島での会議をおこなった。原爆アーカイブズをもし仮に日本につくるとすれば、NASのABCC関係記録群は組織を示す、Vital Recordsに当たるとメンバーの間で認識をもった。
- (2) 総研大の活動が総括の年度にはいり、学習院科研が近年度から4年間採択されたことをうけ、研究調査のみならず、マイクロ化などを行い、アーカイブズ情報の共有がおこないたいという希望があること。前回収蔵庫の見学をした際に、ダニエルのマイクロがとれて永久保存ができるとよいのだが、という意見もきっかけであったことも伝えた。ダニエルはウェブサイトにはABCC関連資料の資料解題を掲載したのは、1994年に日本とコンタクトがあり、1995年が戦後50年だったことより、これを契機に日本に向けた、アクセス可能な環境をつくりたいと願って目録を作成した、という経緯がある。
- (3) 資料共有化について、だいへん喜ばしいことであると一致。提案自体は、NASの上も反対する理由がなく、目録作成と公開の目的にも合致しているので、賛成を得やすいだろうとの見通しです。むしろ賛成しやすい。
- (4) 今回訪問にあたって、JSPS ワシントンオフィスの菅原先生から NAS に対し、プロジェクトの内容と目的を含め前川訪問にあたっての紹介状のレターを前川が作成した。菅原先生にサイン

をいただく予定だったが、NASの部局長などの名前が不明だったため、空欄のまま、ダニエルに「提案書」の一部としてみせた。

(5) NASの要望

- ① ダニエルは「提案書」について、この内容でもすでに十分とのこと。（*ただどちらが費用をもつかまだ不明で、科研の会議の前なので）科研のプロジェクトの内容や背景などを含めてあらためて簡単な提案書を作成する。

宛先は以下のとおり:(5月28日付のダニエルからの連絡)

Dr. E. William Colglazier, Executive Officer of the NRC.

cc copies: Leonard Kim, Chief Information Officer,

Sue Littlepage, Director of ISSG,

Daniel Barbiero, Manager, Archives and Records

郵送先 : 500 Fifth Street NW, Washington DC, 20001

一応、文書とメールで送るということになった。

(dbarbier@nas.edu)

そこからアーカイブズのダニエルさんが所長などまで書類をまわす段取りをとる。

- ② 上記のメールは、JSPS ワシントンの菅原先生にも CC で送る。
- ③ 日本の私たちはマイクロをとりたいと考えているが、NASとしてデジタルスキャンがよいかマイクロがよいか少し考えさせてほしいとのこと。上に書類をあげていく間に、アメリカの業者に相見積もりをとってみる(NASが行う)。
- ④ 建物の内部の構造の補強などのための移転は、2009年10月くらいだろうとのこと。このところ毎月移転情報が延びている。いったん移転があると建物自体、2年間作業不可能。ただもし移転があったとしても、このコレクションはメリーランドの収蔵庫で別置きにして、業者が作業を行える環境をととのえるので、心配はないので安心してほしいとのこと。

2. 調査資料

(1) 史料群名: Atomic Bomb Casualty Commission 1945-1982

Finding Aid: "Atomic Bomb Casualty Commission Files List 1945-1982"

書架延長: 54.6m (19シリーズ、124箱)

- ① **Box 100:** (Series 14: Division of Medical Sciences-Assembly of Life Sciences

ABCC-Related Subject Files, 1945-1980. Series contains files kept by the DMS/ALS on RERF- and ABCC-related subject.)

数量:8ファイル

枚数:1138 枚(*マイクロのコマ数の参考のため。薄いタイプ用紙が多く思ったより多かった)

ファイル1:State Dept & American Embassy in Tokyo 1964-1966 (125 枚)

ファイル2:State Dept & American Embassy in Tokyo 1967 (102 枚)

ファイル3:State Department & American Embassy Jan-Jun 1968 (133 枚)

ファイル4:State Department & American Embassy in Tokyo: Jul-Dec 1968 (184 枚)

ファイル5:State Department & American Embassy in Tokyo 1969 (175 枚)

ファイル6:State Dept & American Embassy in Tokyo 1970 (99 枚)

ファイル7:State Dept & American Embassy in Tokyo 1971 (144 枚)

ファイル8:State Dept & American Embassy in Tokyo 1972 (176 枚)



Box100

[P1180917]

* 2009年1月に4人で訪問した際は、資料の移管についての文書を中心に調査した。

Box 100 については、ファイル2(前川)、ファイル8(安藤)が行った。(2009年1月)

残りの6ファイル(1964~1971 年)をみなかったため、ここから再開することにする。

(Box 100 続き)

ファイル2:State Dept & American Embassy in Tokyo 1967 (102 枚)

* デジタル撮影(ファイル一部) 画像P1180918-1180951

* デジタル画像の保存先ファイル[NAS ABCC Box 100 ¥ State Dept & American Embassy in Tokyo 1967]

作業: 目録作業(一部)

デジタルカメラ撮影(一部)

紙コピー(該当部分を黄で示した)

期間: 1961-Dec 1967”

ファイルの内容:

1. 日米往復など旅費の問題

① End to Letter Darling-Gardner, 9/10/69

Attachment: 1967年7月18日 中国新聞の記事翻訳[P1180919-920]

(ABCC の資料データの返還をもとめる) *ということは、1968年の返還はなにも知らされていない?

② Memorandum, Mr. Herbert N. Gardner to B.L. Kropp 4月4日の覚書への返事。ABCC の契約書によると、旅行について毎回許可を得ることは書類上必要ないが、AEC としては支払が共産圏にわたることは懸念が生じるために、念のためにAEC-N Y00に報告しておくのが適当であると思われる。

• Attachment 0: Re: Travel to Meetings by a ABCC Staff, 8 April 1963, Herbert N. Gardner, Executive Secretary, ABCC to Dr. George Darling ABSS, MCAF, Navy San Francisco, California

• Attachment 1: Mr. H.N. Gardner to Mr. B.L. Kropp “Travel of ABCC to International Meetings, 4 April 1963.

• Attachment 2: Memorandum Herbert. N. Garder to Mrs. Rita Brandt, “ABCC Travel”

• Attachment 3: ABCC Travel Report (July 1 1961-1962 June 30) to Japan/from Japan, 4 pages ファーストクラスを使う必要があるのか Letter Darling – Dr. Cannon, “Travel”, July 10, 1963

③ “Re: Travel” Letter Martin J. King, Contract Administrator, US Atomic Energy Commission, New York Operation Office to Mr. G.D. Meid, NAS, Oct 4 1963, “Travel Policy” と旅費の概算

④ 旅費の概算と国際会議(共産圏で主催)などについて、事務方の契約の問題など～特に日米間移動の旅費。日本人研究者を含め、旅費の計算を一人ずつあげている。

2. Ambassador Johnson の長崎訪問について

期間: 3 march 1967-2 may 1967

① March 2 1967, Darling to Dr. Robert T. Webber, Science Attaché American Embassy, Tokyo 4月23日ヒルのJapan Advisory Councilとのランチミーティング(ヒルトンホテル)出席の大使への招待

• Enclosure: cc. ltre Darling to Ambassador Johnson, List, JAC members

• Enclosure: Invitation on luncheon meeting at in Tokyo at Hilton hotel, 2 march 1967, Darling to Mr. Ambassador, U. Alexis Johnson

② Letter from Toshio G. Tsukahira, American consul, Fukuoka Japan to Darling,

ABCC Hiroshima on march 15, 1967, “Ambassador Johnson’s visit to Nagasaki”
(デジタル撮影) [P1180922]

- Enclosure: Itinerary for Ambassador Johnson’s visit to Nagasaki prefecture, April 17, 1967(デジタル撮影) [P1180923] 永井博士との会合も予定に入っている。
- Re: Letter from Darling to Tsukahira, 17 March 1967.(デジタル撮影) [P1180921]
- (translation), Nagasaki Press 8 April 1967, “American Ambassador to Visit Nagasaki on 17 April”

(Box 100 ファイル2続き)

3.ABCC と Wisconsin University Medical School と日本のいくつかの大学との調査研究の連携について

① Letter from Darling to Dr. Robert T. Webber, Scientific Attaché, American Embassy, Tokyo, July 12, 1967 (デジタル撮影) [P1180924-925]

I have a report from “usually reliable sources” that immediately after the visit of the JSC committee to Hiroshima two communist representatives of the Hiroshima Assembly demanded that the new mayor request ABCC’s withdrawal. He is reported to have said in effect that this was a joint Japanese and American study of great importance to the citizens of Hiroshima as well as the works and that it should be continued. Naturally we cannot expect to read any quotation like this in the morning papers at this time.

② Re: letter from Darling to Dr. Robert T. Webber, 26 July 1967 (デジタル撮影) [P1180926-927] 新しく就任した山田広島市長の市政で、ABCC の存続が危ぶまれる点について、学術的な問題より政治的な問題に傾斜してきたために、関係者と相談をはじめようとしている。日本の科学者とも連絡をとって、なんとかしようとしている。

4.ドキュメンタリーフィルムの公開について

① Letter from Darling to Ambassador Alexis Jonson, 3 August 1967, “finding “suppressed film”がみつかったこと、広島市の山田市長と公開について話をしたことについて(デジタル撮影) [P1180928-929]

② Re: Letter from Darling to Dr. R. Keith Cannan, National Academy of Science, August 3 1967, “formal request for the release to ABCC of a documentary film on measurements of epicenters and induced radiation and fallout” (デジタル撮影)[P1180930-931]

③ Herbert N. Gardner, Executive Secretary, ABCC to Dr. George Darling, ABCC, 7 August 1967 (デジタル撮影)[P1180932]

“ the Japan Times of 4 August, with a story from Kyodo Washington saying that the documentary will be “returned” later this month. “It appears that a secretly made copy has been in Japan all along and parts were to be shown that evening on television.”

⑤ Re Alexis Johnson to Darling, august 22, 1967, “discussion over mayor Yamada and Hiroshima film,” (デジタル撮影)[P1180933]広島フィルムについてはワシントンではかなり前から話に上っていること、フィルムの撮影場所さえ特定できれば放射性降下物の影響などについても重要な点が判明されるだろうとのこと広島における ABCC の活動が非難されるなかで日本人研究者との連携を通じてなんとかやっていることに対する感謝など

明日は、1967年8月17日の Webber から Darling への手紙から

(Box 100 ファイル2続き **090519 前川佳遠理**)

(translation) Embassy translation of Japanese Journal and newspaper, 1 Oct 1967 [P1180934-938]

Letter of Request, Hachiro Kosasa to Dr. Darling, 25 August 1967, ABCC でとった病理学データを日本側に引き渡せという、東京大学ノブオクサノ教授のチームからの要請。広島県労働組合議長、?? 中国支部長。病理学者、1945 年からの合同調査団に参加している、その後共産党員になっている。原水禁? [P1180946]

Darling 日本で収集したデータは日本政府が自由に使用できるものであるし、日本の財産なのだから、それは問題ないはずだ、というような内容。

(Box 100 続き)

ファイル3: State Department & American Embassy Jan-Jun 1968 (133 枚)

* デジタル撮影(ファイル一部) 画像P1180952-1180986]

* デジタル画像の保存先ファイル[NAS ABCC Box 100 ¥ State Dept & American Embassy Jan-June 1968]

作業: 目録作業(一部)

デジタルカメラ撮影(一部)

紙コピー(該当部分を黄で示した)

1.原爆被害データに関するシンポジウム

① letter from H. Maki, M.D. to Darling, Symposium on Data Concerning A-bomb Casualty”, Dec 18, 1967.

・添付(Translation), 22 November 1967, Holding of symposium on data concerning A-bomb casualty, Shoichi Sakata to Dr. Hirhoshi Maki, ABCC
Sponcer Atomic Energy Special Committee, Japan Science Council
Cooperator: Research Institute for Nuclear Medicine and Biology,
Hiroshima University
Supporter: Chuogoku Press

2. ABCC の労働組合、日本人の人員の予算削減と米国人科学者の ABCC 訪問と旅費の支給について

① B. L. Kropp, Deputy Business Manager to Mr. John Ja Grossbaum, Contract Administrator, U.S. Atomic Energy Commission, New York Operations Office, “Re: Contract AF49-1-GEN-72, FY 1968 Foreign Travel” Dosimetry consultation (Dr. Franklin Hutchinson), Cancer consultation (Dr. Jacob Furth)

② Consultants to Visit ABCC During Remainder of FY 1968

③ Minister Osborn to ABCC, “Presidential Directive on the Reduction of Overseas Personnel BALPA, 1968 Feb (デジタル撮影 5枚)[P1180952-]

④ Letter from Darling to David L. Osborn, American Minister, American Embassy, Tokyo, Japan, 13 Feb 1968, 総評、労働組合など排除のための？人員削減の計画と、ABCC の研究および組織の存続について状況分析と計画案、直接契約の人員を解雇する、どのくらいの人数なら研究遂行可能かなど。[P1180972-978]

⑤ M.E. Rappaport, ABCC to Mr Donald B. MacCUE, American Embassy Tokyo, “Composition of ABCC Staff”, 13 February 1968人員削減のためのデータ(デジタル撮影)

⑥ ABCC ニューズレター「ダーリング所長日本医師会最高優功賞を受賞」Vol.5 No.12, 1967 12 月[P1180979-984]

⑦ 労組の話が延々と続く

⑧ 全学連が広島に入ってきたこと、



(Box 100 続き)

ファイル4: State Department & American Embassy in Tokyo: Jul-Dec 1968 (184 枚)

* デジタル撮影(ファイル一部) 画像P1180989-1190072]

* デジタル画像の保存先ファイル[NAS ABCC Box 100 ¥ State Dept & American Embassy in Tokyo 1968 Jul-Dec]

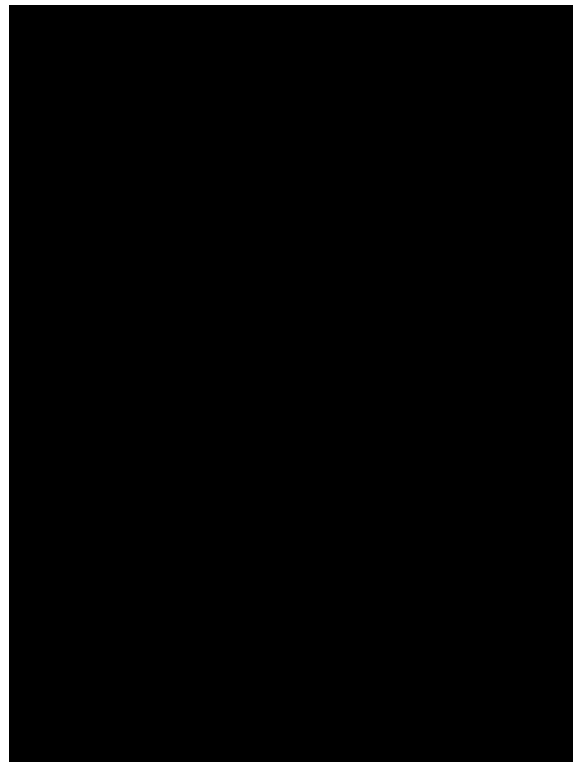
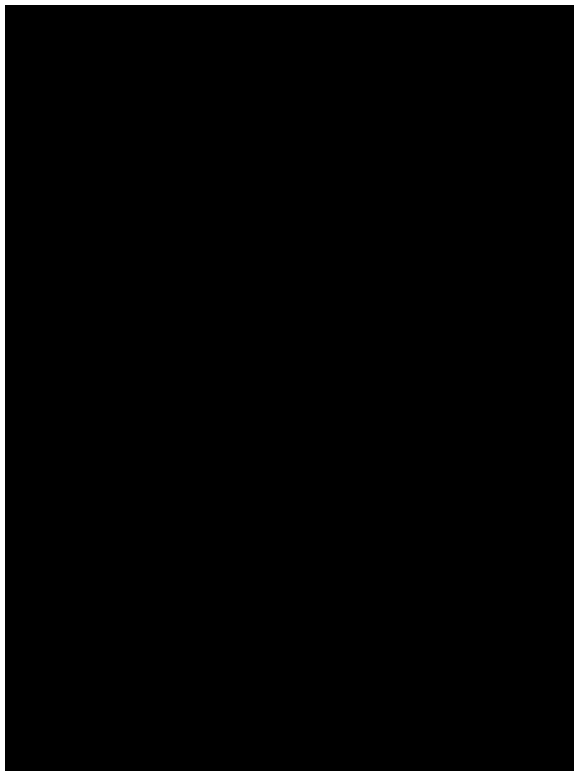
作業: 目録作業(一部)

デジタルカメラ撮影(一部)

紙コピー(該当部分を黄で示した)

内容:

1. 社団法人韓国原爆被害者援護協会設立と被爆データの韓国への公開要請、韓国核エネルギー
① Chi Yul Ahn, M.D., PhD. Director Radiological Research Institute, Office of Atomic Energy, ROK, Seoul, Korea to Chairman ABSS, Hiroshima, August 16 1966.
② “An outline of the Koeran Atomic Bomb Casualty Relief Association”, 16 May 1968
③ 韓国の放射能影響研究所が ABCC の作成した報告書などを共有したいと Darling にレター
④ 韓国人朝鮮人被爆者の問題について
2. 旅費の支給の契約について[P1180987-]
3. 1968年9月7日 Darling to Drl Webber, Science Atache, American Embassy, Tokyo, NHK での ABCC 特集 1968年8月5日の放送について[P1190989-994]
4. 日本政府外務省松村慶次郎より ABCC に寄せられた質問17と M.E.Rapportによる回答、1961年8月17日(大部分の回答は ABCC の年報から抜粋)[P1180995-P1180999]
5. 1968年9月 Briefing by Darling, ABCC to Embassy 日本政府の厚生省高官との ABCC の将来計画の交渉(東京)、米国大使館訪問での会議についての往復文書、厚生省の作成した aide memoire の翻訳、Dr. Maki, Dr. Nitoguri との会議の翻訳など。[P1190001-032]
「1957年の就任以来、両国政府もしくは機関で合意書を交わしていなかったことをしらなかった。厚生省国立予防衛生研究所の要請で、1958年12月に被爆者の生涯調査の件が最初の合意書。5件の合意書についても同様にしたい。今回の話し合いや「返還」問題のとりあつかいが、日本の左翼運動に対応するためという印象を与えるのは逃れたい。
米国大使館では、沖縄返還問題とも関連して、今回の ABCC の問題については State Government が協議には参加しないほうがよい。ABCC の予算について、米国大使館から日本の外務省に交渉をもちかけるのは問題をこじらせるだけである。米国側が日本側に予算措置をお願いすることを交渉しようとする米国の人物はいまのところいない。米国では予算削減計画 Balpa が進んでいるので、ABCC についても見直しがあり、これまでのような5年間計画のようなことはありえない。」(-P1190017)



左:国立予防衛生研究所長小宮義孝 あて[P1190027]、右:厚生省公衆衛生局長 村中俊明博士あて [P1190027] Darling, ABCC より。ABCC 活動で生み出された資料および使用してきた土地建物の取扱についての覚書。今後の取扱についての同意書草案はこの続きの文書にある。

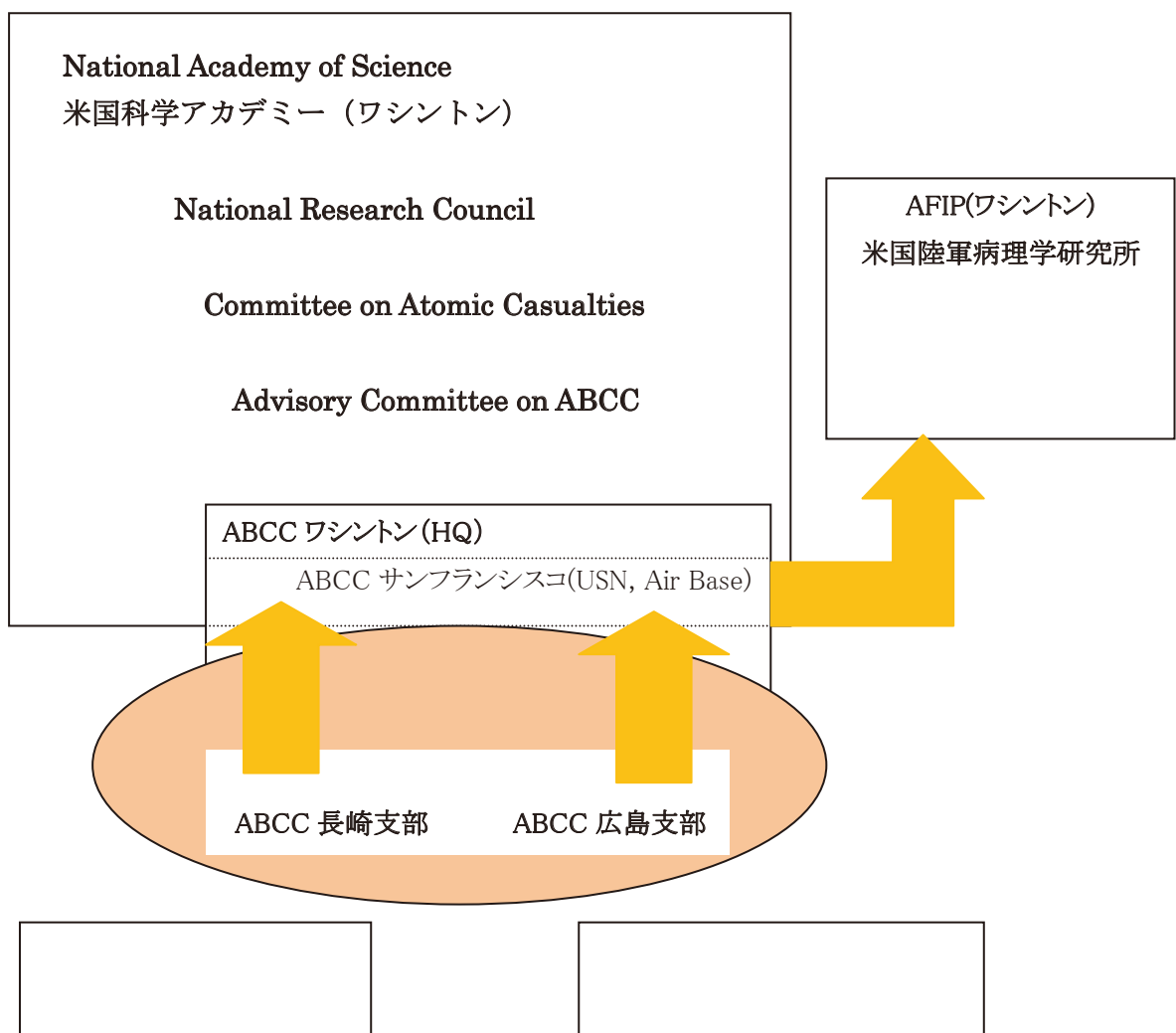
6. 収集資料の取扱と今後の保存の方針について同意書草案 (ABCC, Daring 作成)
[P1190031-032]

- 活動によって生成された資料の原本は、現在も将来も厚生省予研の所有であることを確認し、成文化する目的。
- 米国側は必要な資料について米国に送り、複製を作成することができる。
- 将来の保存の観点から(「天災や暴動からまもるため」、予研支所長の判断で、マイクロフィルム、電子計算機テープ記録、あるいは他の方法で複写し、次の3か所で保管することができる。(1.ABCC と予研の共同管理による広島、2. 厚生省管理による東京、3. 米国学士院下の ABCC の活動が終了した後は米国原子力委員会のワシントン)
- 予研とABCCは、将来の研究内容によって必要がなくなったと考えられる資料に関しては、厚生省衛生局長の指示により処分することができる(記録管理規定)
- 被爆者以外の個人データは、各個人の秘密が守られる範囲で、予研支局長の判断で、適当な政府機関、大学などに資料の移管をすることができる。移管の記録は、予研支局長が作成し、厚生省公衆衛生局長・予研所長・ABCC 所長に一部送り、米国学士院医学部長へ2部(一部は米原子力委員会に回送)するものとする。
- 広島の剖検資料は、広島大学原爆放射能医学研究所に施設が備わった際に移管、長崎

マイケルの話によると、ABCC でとったカルテなどや病理学資料は、マイクロフィルムをとってメリーランドに保管されている(参照 BOX20 のマイクロフィルム作成リストなど)。マイクロは日本にもあるはずという。ただ、どこにどのようなかたちであるかは不明とのこと。マイクロは、今後の日本での資料調査の参考のために、一部をプリントアウトしてくれた(カルテなど25枚)。これは広島か、長崎にあるもののオリジナルと照合できる。

まとめ:

1945年～1973年ころまでの資料の流れの大枠の概念図 (下の図の資料の流れの数量や、機関の関係は時間切れで未完成、調査ノートには手描き)



には長崎大学医学部病理学教室に移管することであったことを確認する。

6. 日本人から収集した被爆者データについては、日本国政府の財産であるのでしかるべき段階で“返還”されねばならないという書類が存在したことについて感知していなかった。データの今後の取扱と“返還”に関して、ABCC に対する左翼の批判に対処するために、日本の構成所がデータをすでに何年も“共同管理”しているということをきょうちょうしたい。米国は財政的な問題といっしょに提案をおかないたい。

このような文書があったことについて、政府高官が(特に米国国務省が)言及していなかったことは、あきらかな怠慢であるし、大きな問題である。50年代の状況を知りすぎている者にとっては、60年代の ABCC の状況の変化に対応することができなかったのではと推測している。

ABCC の20年間の活動ののちに、“返還”に関してあらためて念書のかたちで文書化したものが両方で交わされている。またどのように“返還”するか、施設の建設なども広島大学で行われるとの情報も明らかになった。

ファイルの全体はとらないで、必要な部分についてデジタル撮影を行い、明文化された文書については、紙でハードコピーをとることにした。

(Box 100 続き)

ファイル5: State Department & American Embassy in Tokyo 1969 (175 枚)

前のファイルに時間をかけすぎて中身はみていない。

2009年5月20日ここから再開

Airgram from Department of State to Amembassy Tokyo, “Atomic Bomb Casualty Commission”

ABCC の今後の改組にあたって、米国は日本との共同出資の研究所にしたいとの提案書を作成している。(デジタル撮影)

Letter from Darling to Dr. Charles L. Dunham, NAS, may 17 1969, アイゼンハウアー大統領と岸首相のゴルフのなかで、広島と長崎に病棟を検察する件で、マッカーサー大使が60万ドルを用意することになっていた、佐藤首相は、ニクソン大統領を近く訪問する。その際に、この ABCC の件については、政治的な問題ではなく、科学的かつ人道的な目的でおこなわれると、ニクソンが佐藤首相に言わせるように説得できれば、その後はうまく運ぶだろう。(デジタル撮影)

Letter Darling to Mr. William J. Cunningham, First Secretary of Embassy, American Embassy, Tokyo, July 22 1969, 上記の長崎と広島大学への病棟寄贈は、すでに決まったものというわけではなくて、マッカーサー大使の関心があることから、適当な財源を得てから、の問題。特に政治的な

優先順位の高い日本の米軍基地の問題とのバランスによるもの。病棟については、適当な時機がくるのをまってもらいたい。(デジタル撮影)

Letter from Darling to Dr. Charles L. Dunham, NAS, August 22 1969, Attached are copies of a briefing paper prepared for AMb. Meyer, and my notes on Dr. Daling's recent visit to AMEmbassy-Tokyo.(デジタル撮影)

Letter from William J. Cuningham, First Secretary of Embassy to Darling, August 28, 1969, "Joint study on the future of the ABCC and talking paper of the Foreign Ministry".(デジタル撮影)

Letter Charles L. Dunham to Darling, 18 Sept 1969, "The Embassy document about Chiba's talk"(デジタル撮影)

Letter from Darling to Dr. Charles L Dunham, Sept 9 1969, "日本の厚生省のどの人と話をすればすすむのかわからない、日本の科学者と話をした方がわかりやすい"(デジタル撮影)

1969年10月30日駐日米国大使の来訪、広島。

ファイル6: State Dept & American Embassy in Tokyo 1970 (99 枚)

デジタル撮影データ[P11900117-121]

Letter from Darling to Dunham, NAS, August 18, 1970, "channels of Japanese Ministry agencies to contact and analysis"

ファイル7: State Dept & American Embassy in Tokyo 1971 (144 枚)

デジタル撮影データ[P11900122-131]

Letter from Robert W. Hiatt, Scientific Attache to Darling, July 6 1971, ABCC の存続の働きかけについて外務省が沈黙を続けていること、日本の省庁へアプローチの方法について外務省を通じてではほとんどなにも起こらなさそうなこと、今後の計画の進め方について

ファイル8: State Dept & American Embassy in Tokyo 1972 (176 枚)

Letter from Darling to Dr. Charles L. Dunham, NAS, Sep 13, 1972, Cultural Attache's invitation of a meeting of the US-Japanese conference on educational and cultural exchanges at NAS, June 21 19972.

Attachment Mainichi daily news, June 24 1972

Attachment, Japanese advocacy committee, ABCC

Series 3: ABCC Program Components, 1947-1973. Series contains records of ABCC Study Programs. Includes correspondence, memoranda, project outlines, reports, and other materials.

② **Box 27**

数量:10フォルダ (目録には13フォルダ)

内容:病理学の往復文書、病理学の研究計画(案)、AFIP に送られた病理学標本のアクセス
ション・ナンバーおよびリスト

デジタル画像:[P1190078-P1190464]

* 目録にある、次の3ファイルはこのボックスにはない(ダニエルに確認済)

Pathology: AFIP-Pathology Correspondence: 1968-1971

Pathology: AFIP-Pathology Correspondence: 1959-1967

Pediatrics (PE-18): Basic Tabulations- Medical DATA: n.d.

ファイル1. Pediatrics: 1948-1957

分析後の資料? 理解がむずかしい

ファイル2. Pathology Research Plan: 1962

作業:デジタル撮影 ファイル全部

広島、長崎での病理学の研究計画(案)、死亡者へのアクセス方法、検体のための様々な
書式、家族などへの連絡方法などもふくめ、詳細にわたる計画

ファイル3. Pathology Program Review Dr. Laqueur 1957

Gert L. Laqueur, M.D., "The Pathology Program at ABCC" (デジタルなどとしてい
ない)

ファイル4. Pathology Program 1949-1958

作業:デジタル撮影(全)

内容:献花の種類、香典の目安、葬式の費用、棺桶の値段などもふくめ、

Memorandum from The Executive Director, ABCC to Dr. E. Murphy and Dr. N
Janovski, "General Policies that should guide the conduct of the program in
Pathology at ABCC", May 1 1957 ABCC のプロジェクト計画の方針、収集資料の取扱
い、AFIP との関係(デジタル撮影、紙コピー)

Letter from Dr. Cannan to Shields, Averill, and Keith, Dec 5 1958, and "Comments
on attrition in the pathology program" (デジタル撮影)

Re: Letter from Seymour J Ablon to Dr. Cannan, "Letter to Dr. Furth", 15 Dec 1958
(デジタル撮影)

ファイル5: Pathology Program 1961-1962

ファイル6: Pathology: Janovski Review of Nagasaki Surgicals at AFIP 1951-1957

"AVCC Pathology Case Shipments to AFIP", Dec 22, 1958

内容: ABCC で収集した資料の内容、数量、取扱と、AFIP への送致について

作業: デジタル撮影全部、紙コピー、1枚)

ファイル7: Pathology: Janovski Patient Listing Hiroshima Surgical at AFIP 1958

作業: ABCC から AFIP に送られたアクセッション・ナンバーのリスト(デジタル撮影)

ほかの文書は時間がなくてコピーできなかった。

ファイル8: Pathology Correspondence 1966-1968

作業: 5月19日に帰り際に少しだけ紙コピーとデジタル撮影をしている。重要なので、ファイル
全体のコピーが必要、時間がなくてできなかった。(紙コピー4枚)

内容: 移管のリストがある。(以下を参照)

第16回の shipment のリスト(13 Nov 1968)

Memoranda for Dr. Steer, ABCC の活動記録と資料保存の方針について

17th shipment レターのみ、リストはなし

18th shipment レターのみ、リストはなし

19th shipment レターのみ、リストはなし

ファイル9: Pathology Correspondence 1969-1971

Letter and Autopsy no. list from Arthur Steer, MD, Chief of Research in Pathology
to Dr. Kaichi Fukazawa, Research Institute for Nuclear Medicine and Biology,
Hiroshima University, 29 Sep 1969 広島に送られた組織資料、プロトコール、スライド
などリスト (紙コピー, 9枚)

Translation, letter from Taro Kai, Director, Tadanori, Hiramoto, Chief of Pathology
Department, Hiroshima Citizens Hospital, to Dr. George B. Darling, , 10 May
1971 (紙コピー、2枚)

Letter and protocols no. listing from Kaichi Fukazawa, Hiroshima University to Dr.
Arthur Steer, Chief of Pathology, ABCC, 17 March 1971. 広島大学の病理学室に

送られたはずの 90A シリーズ、440AH シリーズが紛失して、見つからないこと。(紙コピー、3 枚)

Letter and listing of shipment, from Tsutomu Yamamoto, MD, Assistant Chief of Pathology, ABCC to Captain Bruce H. Smith, MC, USN, The Director, AFIP, 4 Feb 1969. (紙コピー、3枚)

ファイル10: Pathology Correspondence 1972-1973

パラパラとみた。

List of Protocols, Slides & wet tissues (1968 ABCC Autopsy cases) sent to Specimen center, 24 May 1973. (デジタルコピー)

2009年5月21日 AFIP Otis Historical Archives

National Museum of Health and Medicine, Armed Forces Institute of Pathology (AFIP)

所在地: Otis Historical Archives, National Museum of Health and Medicine, Armed Forces Institute of Pathology, Washington, DC 20306-6000

連絡先: tel:202-782-2212; fax: 202-782-3573

<http://nmhm.washingtondc.museum/collections/archives/archives.html>

調査者: 前川佳遠理

担当者: Michael Rhode, Archivist

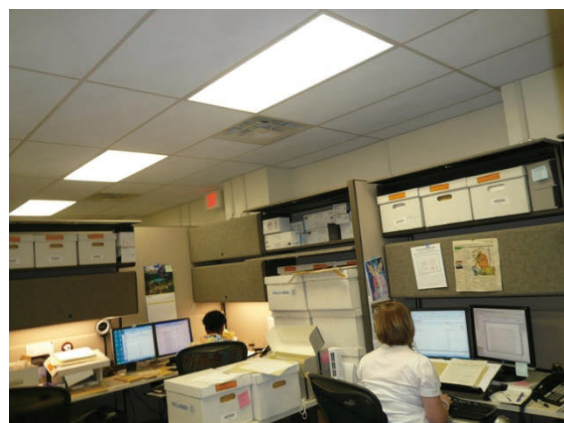
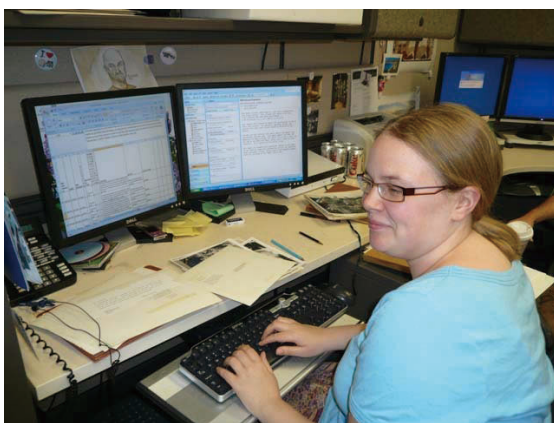
* 文書中の番号は前川が撮影したデジタル写真データ番号

1. AFIP のデジタル化プロジェクト:

(1) Archivist の Michael Rhode の話によると、AFIPの資料のデジタル化プロジェクトが進行中とのこと。おもなターゲット資料は、Civil War, WWI, Iraq war, 9.11 など。すでに20万点撮影および目録化済み。

(2) AFIP デジタル化の流れ:

デジタル化の現物撮影はメリーランドにて行っている。撮影後の画像データに付与する記述情報として、とAFIPに保管される現物資料をもとにアーキビスト技術者7人で、アイテムレベルの目録を作成し、公開準備をすすめている。疫学調査、病理学調査、歴史資料、その他様々の媒体を、迅速に目録化し、館内データベースで共有している。デジタル画像は一点ずつのアイテムになるので、膨大な作業を伴うが、将来有益に使える。アーカイブズ技術者は契約で雇用している。



以上のデジタル化プロジェクトのターゲット資料に追加する形として、Atomic Bomb Material を含むことは可能とのこと。8、9月が米国の年度末にあたるので、だいたいそれごろまでに、次の年度のプロジェクトの概算を出す予定。また同時に、デジタル化の契約を更新する予定である。

従来AFIPは、他のさまざまな機関と同じく、収蔵するコレクションが別々のデータベースによって管理されていた。そのため、コレクション概要情報のみのデータベースを作成し、アイテムレベルの目録は、別に管理していた(80GのHD)。8年前に、EMU データベースを発注、設計した(オーストラリアの業者)。複数のコレクションデータベースを簡便にアクセス可能とする目的で発注された EMU システムは、アーカイブズ、歴史資料、博物資料、医学データ、写真、音声資料など、大きさも内容も異なる記述領域をもつデータを、階層構造をもちいて相互に参照できる。概要情報を開き、アイテムレベルの情報も階層的に表示され、写真資料や画像データは参照のために 300dpi を用いている。利用可能なデジタル画像データの画質はもっと高いが、確認をわすれた。デジタル化された画像データのアクセスが容易になったため、重いデータをデータベースに使用する必要が軽減された。また音声資料にも目録からアクセスが直接に可能で、館内データベースが使用できる PC で視聴も可能である。

現在は、コレクション管理のために主に使用されている EMU システムであるが、あと数年かけて日常的な業務管理の流れも同時にデジタル化保存するようにも考えている。

(3) デジタル化費用について:

先方はAtomic Bomb Materialデジタル化に関する費用は日本で持つことについて、総研大、学習院、どちらでもまったく構わないとのこと。8、9月が米国の年度末にあたるので、だいたいそれごろまでに、デジタル化の契約を更新する予定である。前回の契約の見積もりをメールで送るので、それで費用について日本で検討する材料にしてほしいとのことである。

日本で複製データを保存公開するというのは個人情報保護の観点より、AFIP の機関の他の部門で、問題があるかもしれない。

デジタルデータを共有化したあと、日本で公開することも前提にしていることは先方に伝えてある。また、保存の観点から、デジタルデータからマイクロを作成する可能性も考慮していることを伝えた。先方も、AFIP だけでなく、日本で Atomic Bomb Material コレクションの利用が可能になることはとても望ましいと先方も考えているので、できるだけ早く実現したいとのことである。

(4) 今後の進め方の留意点

①アーキビストのマイケル・ロードがデジタル化プロジェクトのマネージャーも兼ねているので、先方の機能的な問題は心配はないとのことである。ただ、どちらにしても、AFIP の中でもう一名決裁を必要とするそうである。

②AFIP のデジタルデータには撮影時にデジタルスタンプなどが含まれているかは確認するのを忘れていた。また、ABCC 資料を AFIP のデジタル化プロジェクトに追加した際、AFIP の経費で、他の

目録と同じように先方でアイテムレベルの目録化を行うのかについては、あらためて確認をする必要があるかもしれない。

③日本にも同様に個人情報保護法があるということ、個人データの公開については閲覧の利用規定が原則になると思われると説明した。原則としてはできるだけ公開する方向であるが、個人の医学的なデータのため、故人であったとしても家族だけが閲覧可能であるなど、もしくは家族の同意が必要であるなど、規則の運用があることについても説明した。この点については、両者のなんらかの簡単な合意が必要と思われる。これについては、総研大「戦争と平和」「学習院安藤科研」で細部について提案することを考えたいと伝えてきた。先のことでもあるが、そもそもどこで保管して、公開するのか、考えることになると思う。

④デジタル化のプロジェクトが先方で走っているので、それに乗ればいいのでは。ただ、光学的にも保存の観点からもマイクロが圧倒的によい。マイクロの場合はモノクロが基本(カラーマイクロは長期保存に適さない)。原本からマイクロが最も画像の質がいいが、次の手段として画像の品質は劣るものの、デジタル画像からマイクロを起こすことは可能。日本の業者がたくさんやっている。赤鉛筆や色つきの紙などの情報は、デジタルの方が白黒のマイクロよりはっきりでる。コマあたりの価格は国際マイクロからもらった。調査のファイルと一緒に自宅にあるので、この点はまた別のときにお知らせ(うろ覚えでは50~100円)。また日本にも被爆者関連のマイクロで、米国で複製をとったものがあったとの記憶、高橋さんのお話があったと思う。どの資料だったか確認をとる必要あり。

2 調査資料

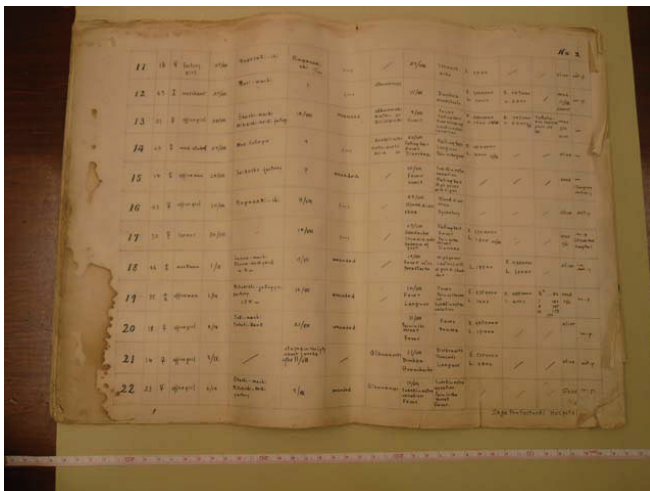
(1) 史料群名 : Saga Military Hospital 17 Oct 1945

史料群番号 : 2000.00.38 (?)

数量 : ファイル1

概要 : 長崎の被爆者のうち佐賀県立病院で手当てを受けた患者のリスト

(*参照フォルダ [20090521 Saga Prefectural Hospital] デジタル撮影番号 P1190475-485)



*佐賀の病院で手当てを受けた被爆者(長崎)のリストがある。(デジタル撮影, サンプルとして) 表紙はなくなっている, NO.1~20

(2) 史料群名: Atomic Bomb Material 1945-1973

史料群番号: OHA 104

Finding Aid:

http://nmhm.washingtondc.museum/collections/archives/asearch/afinding_aids/abomb/abomb.html (2009年2月現在)

① Box 14:

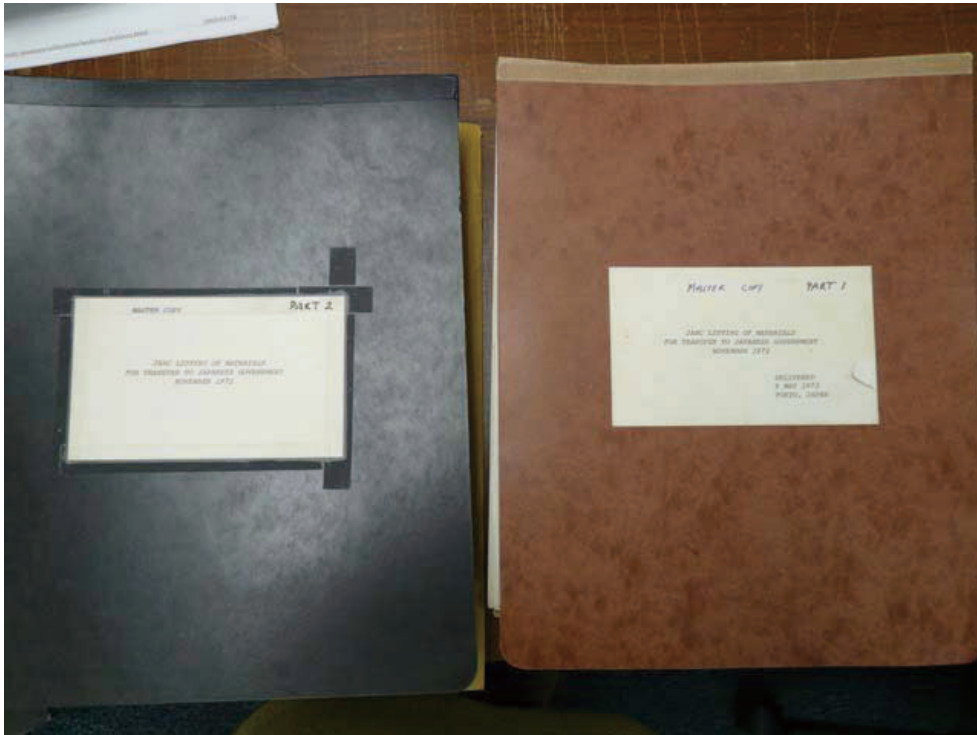
数量: 2ファイル

2009年2月の訪問で、撮影が完了しなかった Box 14. Part 1 (1974年の日本政府への返還マスターリスト)のデジタル撮影のつづきをする、完了。

* 前回の撮影データは画像 P1180403-P1180606 (フォルダ[20090205 DC AFIP])

* 今回の追加撮影は画像 P1190824-P1200040. (フォルダ[20090205 DC AFIP]に統合)

Box14のうち、Part 2 (2009年2月、高橋さんとパラパラめくる形で撮影している)とある。写真や新聞報道などを含む。今回も Part 2 については撮影していない。返還のマスターリストである1のみデジタル撮影した。



Box 14 のファイル。右が Part 1, 左が Part 2

Volume	Accession No.	Accession No.
258 942		258 977
258 944		258 972
258 947		258 973
258 948		258 974
258 949		258 975
258 950		258 976
258 951		258 977
258 952		258 978
258 953		258 979
258 954		258 980
258 955		258 981
258 956		258 982
258 957		258 983
258 958		258 984
258 959		258 985
258 960		258 986
258 961		258 987
258 962		258 988
258 963		258 989
258 964		258 990
258 965		259 000 x
258 966		259 001 x
258 967		259 002
258 968		259 003
258 969		259 004
258 970		259 005 x x

Reg. #	Accession	Description	RAW	Color
RB 100 AAB	158930	General view of city before and after	2	
RB 101 A,A,C	158930	Aiohashi, bridge and Chamber of Commerce before and after	3	
RB 102 AAB	158930	Municipal office (city hall)	5	1
RB 103 A,A,C	158930	Castle (Hiroshima)	3	
RB 104 A,A,C	158930	Second primary school and surrounding buildings	3	
RB 105 AAB	158930	Railroad Station	2	
RB 106 AAB	158930	Seibi bank	2	
RB 107 AAB	158930	College of lit. and science	2	
RB 108 A,A,C,D,E	158930	Industrial high school	5	
RB 109 AAB	158930	Electric building	2	
RB 110 AAB	158930	Chugoku press bldg.	2	
RB 111 AAB	158930	Rear view of Seibi & Sunstou bldgs.	2	
RB 112 AAB	158930	Prefectural office	2	
RB 113 AAB	158930	BQ 5th division	2	
RB 114 AAB	158930	Military cadet school	2	
RB 115 AAB	158930	Chamber of Commerce	2	
RB 116 AAB	158930	Koyas bridge	2	
RB 117 AAB	158930	Kowya street	2	
RB 118 AAB	158930	Commercial museum	2	
RB 119 A,A,C	158930	Communications building	3	
RB 120 AAB	158930	Radio station	2	
RB 121	158930	Hiroshima central telephone office	1	
RB 122	158930	Roof, Hiroshima central telephone office	1	
RB 123	158930	Hiroshima central telephone office	1	
RB 124	158930	Hiroshima central telephone office	1	
RB 125	158930	Hiroshima communication dept. savings bank	1	
RB 126	158930	Gomahashi & bldgs. in vicinity of Tenjin-machi before bomb	1	
RB 127	158930	Teranachi-dori before bomb	1	
RB 128	158930	Naval academy before bomb	1	
RB 129	158930	Ujima harbor from Ujima Island before bomb	1	
RB 130	158930	Kikutai temple before bomb	1	
RB 131	158930	Hiroshima-general view from south by airplane before bomb	1	
RB 132 AAB	158930	Before and after atomic bomb	2	
RB 200	158930	Banker's club	2	
RB 201	158930	City hall	2	
RB 202	158930	Electric bldg.	2	
RB 203	158930	Hippon bank	2	
RB 204	158930	Red cross hospital	2	
RB 205	158930	Telephone bldg.	1	
RB 206	158930	Broadcasting studio	1	
RB 207 AAB	158930	Communications bldg.	2	
RB 208	158930	Post office hospital	1	
RB 209	158930	Chugoku HQ	1	
RB 210	158930	Locations by ring roads of buildings studies for shelling effect-map	1	

上の画像は、BOX14 の ファイル Part 1 の内容。

左:1973年に日本に返還された ABCC から AFIP に送られたアクセス番号のついた病理学データチェックリスト 右:爆風などを受けた建物の被害、被ばく者の写真など、159030シリーズの資料(上田哲が1971年にはすでに日本に戻っていると国会質疑で述べている資料に該当する)

② BOX 15:

内容: 返還についての資料。Box 14 のマスターインデックスの写し。

作業:表紙と箱の概要写真を1枚だけ撮影。Box14 の返還マスターリストの Part 1 最初の3ページ分が抜け落ちていたことに気がついたので、Box 15 から補うことにした。

*参照フォルダ[20090522 AFIP Box 15] 画像データ P1200041-P1200046)

③ BOX 20: Correspondence of AFIP, ABCC: Concerning A-bomb materials.

数量:1~6ファイル(第6ファイルがない)

概要:AFIPとABCCの往復文書がある、ABCCからAFIPに送られた検体などのリストや送り状などが含まれる。NASの返還関連資料と関係が深い(ABCCからNASに送られた文書)

作業:第1ファイル(1940~50年代)、第2ファイル(60年代)、第3ファイル(70年代)についてはデジタル撮影。第



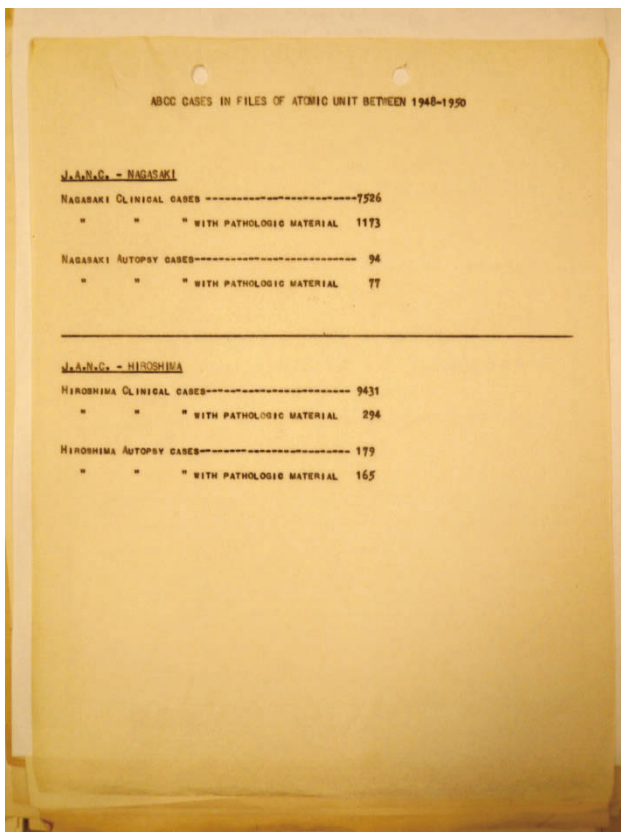
4ファイルは冊子体で撮影していない。第5ファイルは概要だけ1枚撮影。

(Box 20 AFIP つづき)

ファイル1. Correspondence of AFIP, ABCC: Concerning A-bomb materials. Dated 1940s and 1950s.

* デジタル撮影(ファイル全部) 画像 P1190491-1190642

* デジタル画像の保存先ファイル[AFIP box 20 file correspondence AFIP and ABCC concerning Abomb materials 1940-50s]



左: 合同調査団が収集したデータ(1948-50年)、ブロック・スライド・剖検組織ほか。マイクロが作成されて、米国に送られている、計 1471 リール。このうしろの文書は、内訳の詳細 [P1190522]

画像右: 剖検データとマイクロの相互参照リスト[P1190525]

* 以上のマイクロはメーランドに永久保管。サンプルとして、アーキビストのマイケル・ロードが紙焼きをくれた。(前川保管)

ここからはメモ。デジカメで撮影をはじめたので、きちんとした目録とりは途中でやめた。とってきたデジタル画像をみながら、気がついた点を羅列(ABCC と AFIP との往復文書)

- Microfilm received from ABCC 1948-1958, Hiroshima 1178 reels, Nagasaki 293 reels.
- Black-schaffer, 1951 Tissues 177, Dolaldson SLIDEW 32, など

- ・1946年の合同調査団の活動記録報告(機密解除)、
- ・原爆被害調査継続について大統領に要請文、
- ・ABCC が AFIP の軍施設を使用できるようになったレター、
- ・長崎医科大学作成の島原市の被爆者被害状況報告(名前、病状、リストほか)、
- ・ABCC→AFIP 剖検資料 送り状と AFIP の受取書とリスト
(日→米の流れ これを揃えて、米→日の返還資料とクロスチェックと、AFIP にまだ残る資料も判明する可能性、1951年8月～) [P1190527 ～]

Letter from George Fukui, Business Manager Tokyo, ABCC to General Elbert DeCoursey, MC., Director AFIP, DC, 21 august 1951, “shipment of 5 boxes of medical records via Army parcel post” [P1190527 ～]

- ・ Letter from Elbert DeCoursey, Brig Gen. MC. US. The Director AFIP to Dr. Grant Taylor, Director ABCC, San Francisco, California, 18 Jan, 1952 “3 の送ったリストと異なるモノが一部届いていること。リストにないものがあり、リストにあるものがないこと” [P1190540]

- ・1952年3月に作成した剖検データ マイクロのリスト(218 リール) [P1190546]
- ・1952年3月～4月 日本から送られた Jar ホルマリン資料? slide block スライドなどは、核エネルギー省? の福数の米国人医師に回覧されている。被ばく関係の資料で、日本人の被爆者資料群は、アクセス番号では日本人のものとはわからないように表現してある。例外はウサギの1例のみ、日本のものとアクセス番号をつけている。日本人被爆者の資料には、暫定的なアクセス番号をつける。AFIP が日本からクロスチェックのリストを受領したら、AFIP が固有の番号を各資料につけることとなった。[P1190547-P1190569]
- ・1952年 5 月に作成した剖検データ マイクロのリスト(リール番号 219-363)
- ・1952年4月、剖検データの受領レターとリスト(AFIP→ABCC サンフランシスコ) [P1190574-577]
- ・1952年3月、NAS の医科学 放射能被曝委員会の作成した被爆者タイプ分析の報告書と送り状(→AFIP) [P1190578-580]

- ・ABCC サンフランシスコ→1952年4月に AFIP に梱包送付したマイクロ(リール番号 219-363)のリストと送り状、マイクロ撮影対象のデータ詳細リスト(マイクロ番号に加えて、仮の? 整理番号や名前が付いている)、4000件の IBM カード送付、到着の遅れなど。 [P1190581-597]

Letter and lists from Earle L. Reynolds, Biostatistics Dept. ABCC San Francisco, to AFIP, DC, “ microfilm shipment on 21 april 1952, 4 cases of 36 rolls of microfilm, making the total of 144 rolls”, 24 April 1952.

Letter and from Earle Le. Reynolds, Chief of Biostatistics Dept. to General Elbert DeCoursey, Director AFIP, DC, “ listing of case numbers of about 4000 IBM cards

which were sent to AFIP on 18 March. Genetic-Pediatric Follow-up cards for Nagasaki, 1951.

- ・1952年5月に AFIP で受領した剖検資料のリスト(鉛筆、赤鉛筆でチェック入り)[P1190599-616]
- ・1952年6月19日 AFIP 作成。広島 ABCC マスター・ファイル・インデックスと、現物資料と、AFIP のアクセス番号の照合の問題と解決方法について。[P1190617]
- ・1952年7月29日 広島 ABCC→AFIP の剖検資料とリスト[P1190618]
- ・1953年4月、5月 広島 ABCC→AFIP の剖検資料とリスト[P1190619-626]
- ・1955年度の ABCC→AFIP の剖検資料の合計リスト[P1190627-629]
- ・1956年の広島・長崎 ABCC→AFIP の剖検資料などの目録[P1190630-633]
- ・1957年の ABCC から受領したマイクロ資料、剖検資料の目録[P1190634-636]
- ・手がき覚え書き、1952年1月サンフランシスコ ABCC→AFIP ハガキでの梱包資料送付の連絡 [P1190639-640]
- ・1952年3月 手描きインデックスカード AFIP アクセス番号のうち、暫定のものとは永久のものについて区別するためのメモ[P1190641]

(Box 20 AFIP つづき)

ファイル2. Correspondence of AFIP, ABCC: Concerning A-bomb materials. Dated 1960s.

* デジタル撮影(ファイル全部) 画像 P1190643-1190768

* デジタル画像の保存先ファイル[AFIP box 20 file correspondence AFIP and ABCC concerning Abomb materials 1960s]

作業: デジタルカメラ撮影(ファイル全部)

紙コピー(以下のみ、以下のファイルの内容において、該当部分を黄で示した)

- ・Letter R. Keith Cannan, Chairman of Division NAS to Major General Joe Blumberg, the director AFIP, DC, 23 March 1967, (2枚、紙コピーもとる)
- ・Shipment list (1), (2) (紙コピーもとる)

ファイルの内容: アメリカでも問題としてあがっていて、AFIP に引き続きデータを送ることもできるが、日本政府も正式に返還の要請をしてくる可能性が高い。また広島大学は建物の建設の資金を調達してきたので、そちらに移管することが現実的なはなしになってくるだろう。

以下、デジタル画像をみながらメモ(重複する文書が多い、全部は網羅してない)

- ・Atomic Bomb Unit 1960年度年報(ABCC から受領した資料の概要と点数など)[P1190644-646]
- ・JANC material 概要と点数 [P1190649-651]
- ・1952年に受領したマイクロロールの一部リスト[P1190652]
- ・1962年7月の Atomic Bomb Material 概要と内容、点数のリスト(JANC 収集資料の内訳について)[P1190653-658]

- ・1956年までに ABCC から受領した IBM カード[P1190659]
- ・1951～57 広島・長崎 ABCC 資料の概要と点数（年度ごと、担当医師ごと）[P1190660-]
- ・1963年5月現在 資料の概要と点数[P1190670]
- ・1963年7月現在 資料の概要と点数（手書き）[P1190671-]
- ・1962年7月調整 240,001 番代の資料目録リスト [P1190673]
- ・1962年7月調整 250,001 番代の資料目録リスト [P1190674]
- ・1962年7月調整 340,001 番代の資料目録リスト [P1190675-676]
- ・1962年7月調整 350,001 番代の資料目録リスト [P1190677-681]
- ・1962年7月調整 360,001 番代の資料目録リスト [P1190682-689]
- ・1962年7月調整 370,001 番代の資料目録リスト [P1190690]
- ・1957年3月まで受領したマイクロフィルムリスト
- ・1962年度 Atomic Bomb Unit 年報草稿 [P1190695-]
- ・1948～64年 受け入れ資料の概要と点数のリスト 複数
- ・1963～66年 受け入れ資料の概要と点数のリスト [P1190719-720]
- ・1966年8月～日本の新聞報道の英文翻訳（ABCC 設立21年目を迎えての特集記事、背景、参加者、予算、目的、存在理由、活動内容、解剖検査、批判、今後の展開、広島大学医学部への期待、ABCC スタッフの外交特権待遇、収集データの日本政府への返還の約束）[P1190721-732]

・Letter R. Keith Cannan, Chairman of Division of Medical Science, NAS to Major General Joe Blumberg, the director AFIP, DC, 23 March 1967（ABCC から1960年以前に、非公式に AFIP に移送した被爆者資料について、要請に応じて、ABCC に引き渡すことが望ましい。収蔵庫の問題を解決するために、何年かに分けて移送することにする。その際には日本政府となんらかのかたちで公式に行うことが望ましい。1968年3月には広島大学に収蔵庫のための予算措置が行われることが決まっている、長崎大学も同様の希望をもっている。

剖検資料、スライドなどが米国に現在存在するという事は、反米運動、左翼運動などを中心に、ここ数年間で大変にデリケートな問題となっている。日本政府が正式に返還を要請するべきだという新聞等の報道もある。したがって、AFIP には適切な措置をおこなってもらいたい。
[P1190733-734]

・Re: Letter Blumberg to Dr. Cannan (ABCC から AFIP に1960年代前に送られた資料は、最終的な収蔵先として AFIP が決められたわけではなく、またこれまで送られた剖検資料は150ケース以下である。半数はまだ ABCC にあるはずで、保存や活用を保全するために ABCC が収集資料を送ってきたにすぎない。半数残っている ABCC の資料についてはわからない。こちらにあるものについては、そちらの要請に従って目録を点検する。デリケートな問題とはこちらでは感じられていない。日本人からそのようなことを聞いたことはない。ABCC のためにやっていることなので、必要ならば喜んで対応する) [P1190735-736]

・1967年3月29日 Director AFIP to David White (上記の問題に対応するための資料を整えてほしい。特に ABCC に関連する支部との往復書簡や、基本的な原則や過去の初期のころの合意書などを調べる必要がある。データは、大きく分けて2通り。参照資料としてのアクセッション資料と剖検資料。後者は150以下と思われるが、要確認) [P1190737-738]

・1967年4月 11 日、Lt. Col. Robert J Preston, Chief Professional Records Service to Dr. Helwig, Chief, Department of Pathology (現在 AFIP に所蔵される被爆者資料のデータ総数。計 25,929 、そのうち剖検資料は計 4007 ケース確認。JANC の活動で収集したデータは計 1795. そのうち剖検資料は 234 であることが確認) [P1190739]

・1967年4月27日、Re: Letter Blumberg to Dr. Cannan (AFIP 所在の ABCC 資料について、調査をした結果、広島 of ABCC に返還されるべきパラフィンブロックは、約 10,000 点であることが判明した。近く、第一回目の移送をおこなう。2回目はその半年後を予定。梱包移送先は、ABCC サンフランシスコの S.E. Gould, Chief of Research in Pathology, US Marine Corps, Air Station.

実際に利用可能な組織資料はごく少ない。このことは、パラフィンブロックについては研究所の Watanabe, Goto に照会できると思われる。

近年は、ABCC からアクセッションや照会はめったにない。これですべてのパラフィンブロックが日本に送られたら、米国の政府機関がこの共同プロジェクトを支援する意義がないのであるから、早期にプロジェクト自体の打ち切りをするべきであるとむしろ提案したい。我々がこちらから返還することによって、日本と米国の科学者のバランスと、両国間のデリケートな問題に終止符をうつことになろう。) [P1190742]

・1967年5月12日 Re: Letter from Dr. Cannan to General Blumberg (本日、貴殿の返答文書を受け取った。貴殿の文書には送られておらず、こちらの機関で受領された記録もない。日本に滞在していた Dr. Gould を通じて、貴殿の日付なしの文書を受け取った。どうして私の手元にあるのか貴殿自身がよく考えるべきである。貴殿の協力で、日本でおこなってきた調査行為の非難がやわらぐだろう。貴殿は、データの照会も近年は少なくなり、AFIP が ABCC に関与するプロジェクト自体を打ち切りにすればよいと提案したのは、実際そのとおりである。これは日本におけるスタッフが競争力と経験をつけてきたからとわたしは考える。このプロジェクトは、米国大統領命令によって、米国の政府機関の財政支援で20年も継続したのであるから、残念なことに時代の要請によって方向を転換するのは難しかった。わたしは、いつもこれまで、ABCC 設立の苦難の時期に AFIP が支援を行ってきたことを恩義の念を持っている。) [P1190743-748] * 日付と CC 先が後からタイプされている一連のレターが添付されている。

・1966 年9月12日 Gardner, Executive Secretary, ABCC to General Blumberg, ABCC 組織の将

来計画について

- ・1967年5月23日 General Blumberg to Cannan, 受領されなかったレターについて Cannan が非難したことについて抗議
- ・1967年6月6日 Blumberg to Gould, ABCC San Francisco, AFIP 資料の ABCC への第一回目の移送、内容は482剖検からえた1500のパラフィンブロック、計2箱、往復文書およびリスト、1967年6月13日広島にて受領の連絡と登録番号変更のリスト(*リストのアクセッション番号は主に340000番代で連続していない)[P1190751-766]
- ・1967年10月24日 Bruce Smith, Captain MC, USN, Director, AFIP to Gould, ABCC San Francisco, AFIP 資料の ABCC への第2回目の移送の連絡(内容は215例の剖検から得たパラフィンブロック計521、(リストは付属していない)[P1190767-768]

ファイル3. Correspondence of AFIP, ABCC: Concerning A-bomb materials. Dated 1970s. (ファイル全部をデジタル撮影する)

*デジタル撮影(ファイル全部) 画像 P1190769-1190822]

*デジタル画像の保存先ファイル[AFIP box 20 file correspondence AFIP and ABCC concerning Abomb materials 1970s]

作業: デジタルカメラ撮影(ファイル全部)

紙コピー(以下のみ、以下のファイルの内容において、該当部分を黄で示した)

内容の概要:AFIP から ABCC への剖検資料などの移送についての、詳細な覚え書き。1960年代末、計56回にわたる移送。1972 年ころより、米国の日本大使館を通じた公式なチャンネルで、返還に関する往復文書あり(担当 Second Secretary, Ichikawa Takashi)。返還先は、1969年11月広島大学原爆放射能医学部研究所原爆医学標本センターにおいて返還の式典をとりおこなうこと、以上の資料については日本政府には表向きは秘匿されている点について、日本の医師から事実確認の照会があったこと。ファイル3は、時間があるときに丁寧に読む予定。

Darling, Director ABCC(1972年)は、1945年8月以降に AFIP が収集した剖検データについて、ABCC に現在移管されたとしても、それに関しては責任はない。AFIP はそれより以前に ABCC には、剖検データの病理学的分析と保全を行っている。ただし、データ収集の活動について深く関与してきた歴史があるために、日本の要請に応じて資料が広島、長崎に返還されることに関しては賛意を表明する。[P1190776]

1971 年12月の上田哲の国会質疑を契機に、日本への AFIP 資料の返還が正式に動き、公式ラインに乗ったクロノロジー[P1190811]

*ただ、NAS の資料にもあったとおり、1968年12月あたりに、外交チャネルを通じずに広島大学の原爆医学標本センターに送っている。そして、一部が不明になっている。AFIP に問い合わせもあった。1970年代の返還リストのほかに、1960年代の返還リストもほしいが、それらしいものは見当たらない。

ファイル4. Charge out and return book for check and location of atomic bomb report.

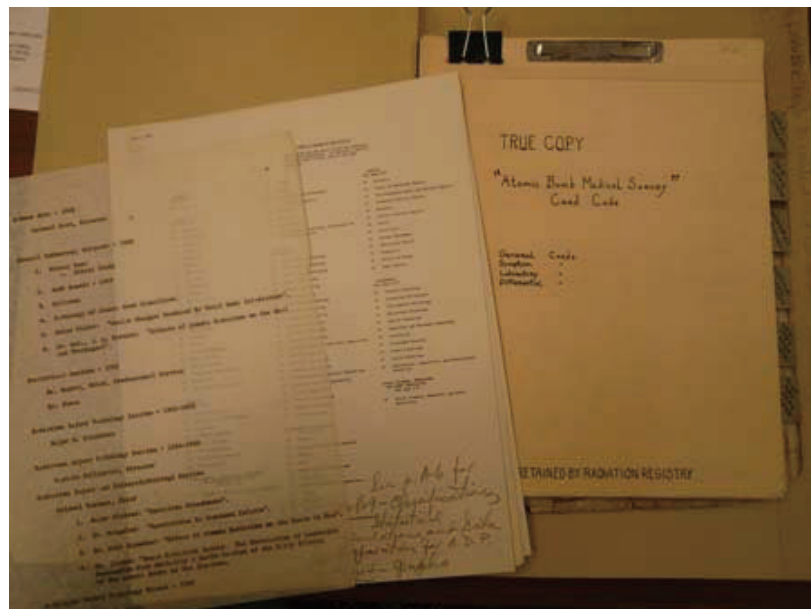
Restricted records だったので、使用者の名前と日付がかかれたブックレット

ファイル5. Possible keys to unidentified numbers on reports about bomb victims

* デジタル撮影(表紙だけを一枚デジタル撮影) 画像 P1190823]

* デジタル画像の保存先ファイル[AFIP box 20 file 5 Possible keys to unidentified numbers on reports about bomb victims]

作業: 今回は時間がないので、内容のチェックも見送った。



(3) 史料群名: Hansen (James L.) Collection

史料群番号: OHA 181.05

年代: 1941～1976

量: 2cubic feet, 3 boxes

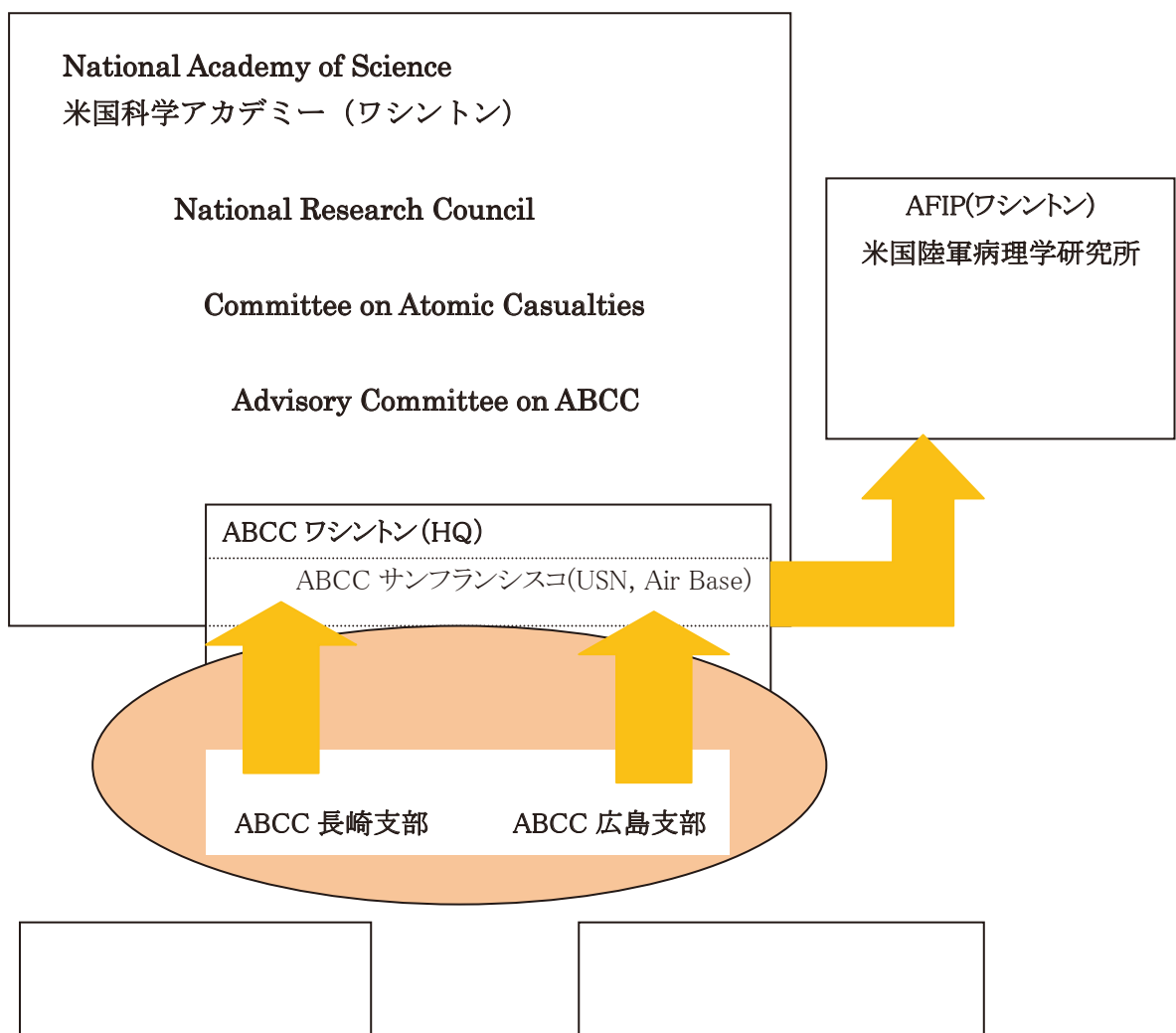
Finding Aid: (2009年5月 ほぼ作成終了 Jasmine から作業中の目録プリントアウトをもらう) 故 J.Hansen の姪が保存していた資料。額や賞状、写真などが中心で、private paper 的な性格ではない内容。

(4) 史料群名: ABCC Medical History 1952年～マイクロフィルム(*正式名称不明)

マイケルの話によると、ABCC でとったカルテなどや病理学資料は、マイクロフィルムをとってメリーランドに保管されている(参照 BOX20 のマイクロフィルム作成リストなど)。マイクロは日本にもあるはずという。ただ、どこにどのようなかたちであるかは不明とのこと。マイクロは、今後の日本での資料調査の参考のために、一部をプリントアウトしてくれた(カルテなど25枚)。これは広島か、長崎にあるもののオリジナルと照合できる。

まとめ:

1945年～1973年ころまでの資料の流れの大枠の概念図 (下の図の資料の流れの数量や、機関の関係は時間切れで未完成、調査ノートには手描き)



ワシントンDC調査報告(2009年12月2日)

前川佳遠理

訪問者:

安藤正人(科研代表)
前川佳遠理(班チームリーダー)
和田華子(今回初訪問)

11月18日 JSPSワシントンオフィス訪問(菅原先生、小寺さん)
11月19日 NAS訪問(打合せ)、夕食(菅原先生)
11月20日 NAS訪問(調査)

協議事項

JSPS

- ・JSPSでは、現在までの科研の原爆班の進捗状況を説明し、NAS所蔵のABCC資料について、アメリカ側でスキャンによる複製の見積もりができるか相談。菅原先生が、米国議会図書館のトモコ・ステーン氏に問い合わせして、米国の業者のみつもりをとることを約束。
- ・AFIPは今回訪問しないが、例年の予算にスキャンと目録化を組み込んでもらったお礼を、一度あらためて訪問して述べたいことを報告。
- ・1月に総研大のメンバーで一度集まることについて日程をきめる(平成22年1月6日)。菅原先生は、1月7日に米国に帰国予定。

NAS (Daniel Barbiero)

- ・「合意書」は、NASの司法関係者が作成したもの。今回は、合意書の作成のお礼をのべて、下記の現状からサインまではいかないことを説明。
- ・「戦争と平和」プロシーディングス(2007、2008、2009)を渡した。
- ・NASでは、日本側でとった見積もりが高く執行できない可能性がきわめて高いことを説明。高い理由とは、日本から業者を派遣する滞在費用を含むこと。
- ・アメリカ側で業者をいくつか見積もりをとってもらおうようお願いし、(パターンは、マイクロはとらない、スキャンのみ、もしくはマイクロをとってスキャンをする)。見積もりは12月の末をめどに日本側に提示してもらおうようお願いした。費用はだいたい40,000ドルくらい(約360万円)でできないか。
- ・収蔵庫について、NASのビルはまだ移転のめどは立っていないが、移転先はメリーランドの大変不便なところになる。NASの非現用記録文書(ABCC資料も含む)は、メリーランドの収蔵庫に移

動するため、それまでに、スケジュールをたてたい。

NAS での調査(20日)

- ・閲覧室では作業が遅くなるので、収蔵庫入室をお願い、目録と箱の中身の照合をおこなった。
- ・資料の両面の印刷体、フィルムなどが含まれているか、紙の色、資料の性質と量を割り出すため。写真を撮影している。写真のメタデータは埋め込んでいない。(詳細は別紙 NAS ワークシートを参照のこと。)
- ・124 箱のうち、50 箱弱が終了。
- ・次回3名で調査して、あと3日あれば終了する見込み。



(上:NAS 収蔵庫のなかの作業、下:箱番号 124 資料が作成時のバインダーに入っている。箱 124 以外はほぼ原ファイル、クリップ、ホッチキスが外され、A4シートになっている)



米国テキサス医療センター図書館原爆傷害調査委員会ABC C関連文書

高橋博子

The Atomic Bomb Casualty Commission Collections, Houston Academy of Medicine-Texas Medical Center Library, 1133 M.D. Anderson Boulevard, Houston, Texas, USA (米国テキサス医療センター図書館)

ABC C (原爆傷害調査委員会) に関与した研究者の個人文書のコレクションが米国テキサス医療センター図書館に所蔵されている。同図書館はABC Cの研究者の個人文書を集める拠点となっており、遺伝学のジェームズ・ニール博士や小児科のワタル・ストー博士など、ABC Cで主要な役割を果たした研究者の文書が所蔵されている。日記、書簡、報告書、原稿、図表、地図、書籍、写真(4000枚以上のプリント、ネガ、スライドなど)。全体の量は約3.4立方メートル。これらの文書を収集し、分析することで、ABC Cの行った被爆者調査がより具体的に明らかになる。

・ Ivab F. Duff, M.D.文書

内科医(1915-1994)。1964年から1975年までABC Cの研究顧問。1975年から1986年まで放影研の研究顧問。(7箱)

・ Jarett H. Folley, M.D 文書

1950年から1951年までABC Cの所長を務める。(3箱)。

・ Marvin A. Kastenbaum, Ph.D.文書

統計学者として1953年1月から1954年5月までの17ヶ月間ABC Cに勤める。その間にABC Cの職員やABC C関連行事を写した映像を含む。(映像資料1箱。工芸品1箱)。

・ William C. Moloney, M.D. 文書

1952年から1954年までABC Cの医学部長を務める。

論文抜き刷り10冊等。

・ James V. Neel, M.D., Ph.D.文書

世界的に有名な遺伝学者。(29箱)

・ Frank W. Putnam, Ph.D.文書 (4箱)

・ Walter J. Russell, M. D., D. M. Sc.文書 (6箱)

・ Wataru W. Sutow, M.D. 文書 (26箱)

1箱(アーカイブスボックス)あたり約700枚収容。

75箱 × 700枚 × 50円 = 262万5000円

写真4000枚 × 500円 = 200万円

計462万5000円

アメリカにおける原爆関連資料調査および聞き取り調査

広島市立大学・広島平和研究所

高橋博子(清水まとめ)

2008年9月6日から18日までアメリカに滞在し、ワシントンおよびウィスコンシンにあるいくつかの機関・研究所等を訪れた。そこに保管されている広島・長崎に関する原爆資料の調査および当時の事情を知る研究者に聞き取り調査することが主な目的である。訪問した機関は陸軍病理学研究所(AFIP)、米国科学アカデミー文書館、米国国立公文書館、ウィスコンシン大学である。

AFIPは南北戦争以降の軍の医学的資料を保管しているところであるが、そのなかの Otis Historical Archives に広島・長崎に関する文書資料がある。この資料については Guide to Atomic Bomb Material という案内書がある。ここには1947年ごろの日本人研究者の日本語のメモなども保管されている。文書の一部は、1945年のものだけ広島大学・原爆放射線医科学研究所に返還されたが、それ以降はもどされていない。その送付リストは存在している。この機関での広島・長崎の資料は軍事利用のためのものである、と位置づけられているため管理が厳しい。ここで得た新しい知見は、ビキニ水爆実験で被爆した第5福竜丸の被害者の標本がアメリカに存在する、と記された文書を見つけたことであった。標本が存在するという噂は以前からあったが、本当に存在するのか確証がなかった。今回は、それが現実に存在することが確実になった。それが記されていたのは被爆者の病理解剖に立ち会った Hansen 大佐のファイルである。今後の調査研究の重要な手がかりになると思われるためファイルのコピーを持ち帰った。余談ではあるが、AFIPの建物は核シェルターとして作られ窓が全くない、という異様な建造物である。

米国科学アカデミー文書館には、ABCC 管轄機関であったため、ABCC の資料が多数保管されている。これらは ABCC 関連文書を歴史的・包括的に調べるためには基本資料となるものであり、永久保存が必要である。ここでは歴史的に重要な資料のコピーをした。それは、ABCC に所属していた科学者 Woodbery に関する資料で、彼は日米両政府ともに重要でないとしていた残留放射線の危険性について早くから警告を発していたことで知られる。

国立公文書館では、アーキヴィストの John Taylor 氏に面会した。氏は1945年からここで働いており、戦略爆撃調査団の報告書をはじめ、歴史的な原爆関連の資料に通じており、生き字引のような方であったが、今回お会いして数日後に87歳で急にお亡くなりになった。長い間にわたって、筆者のアーカイヴズ学における先生役を務めていただいた貴重な方であった。アメリカでもその死を悼んでいくつかの集会がもたれた、と聞く。ここには1990年代に原子力委員会から移管された資料が保存されており、いくつかの資料をコピーした。

参考記事

「米、遺体の組織入手指示：第五福竜丸事件」(『中国新聞 夕刊』2009年2月23日)